女子新國語讀本

安藤正次
東條操 共編

巻四

375.9
An4
資料室

42321
教科書文庫
4
810
42-1934
~~20000~~
~~34993~~
200030
2761

昭和九年一月二十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

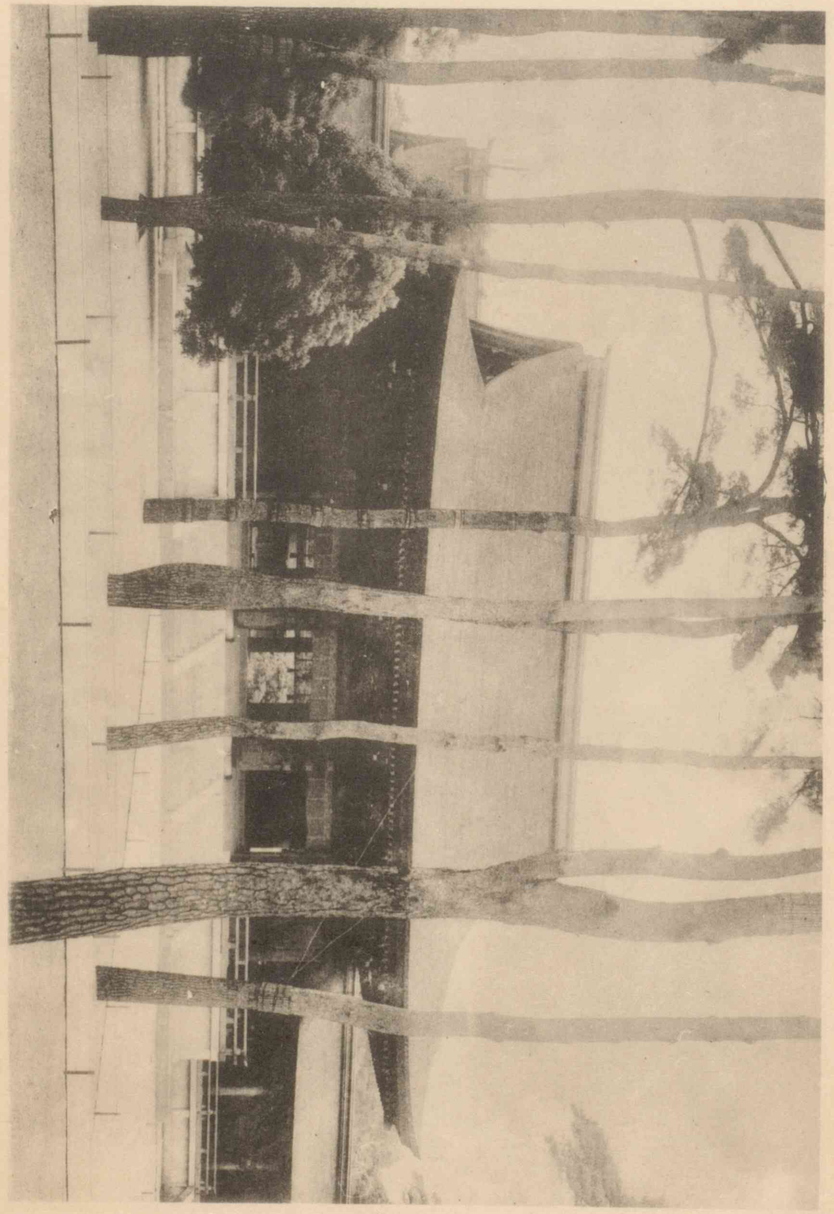
臺北帝國大學教授　安藤正次
學習院教授　東條操
共編

女子新國語讀本

巻四

株式會社　三省堂

資料室
375.9
An4



明治神宮拜殿（第一課參照）

廣島大學圖書之印

広島大学
教
34993
図書

巻四 目次

一 明治神宮　溝口白羊　一
二 明治天皇の御製　北原白秋　一六
三 菊と婦人　棚橋絢子　二七
四 秋空(詩)　中西悟堂　三一
五 柿　五十嵐力　三四
六 我が家の富　德富蘆花　四八
七 霧の倫敦　夏目漱石　五三

八 國際的標準 新渡戸稲造 五九
九 落穂拾ひ 山田邦祐 六七
一〇 玄妙の音 鈴木鼓村 七八
一一 人の運 大町桂月 八六
一二 形 菊池寛 九二
一三 明るい顔(詩) 河井醉茗 九八
一四 色 青木良吉 一〇一
一五 古名將の嗜 湯淺常山 一〇六

一六 春夏秋冬(短歌) 諸家 一一四
一七 文章の道 島崎藤村 一一八
一八 本居宣長の母 佐佐木信綱 一二六
一九 我が國の家庭 芳賀矢一 一三四
二〇 この正月 落合直文 一四二
二一 祖先の祭祀 松平定信 一五〇
二二 春うごく 長塚節 一五五

二三　自然の力　吉江喬松　一六三
二四　蟲の世界　横山桐郎　一六六
二五　夜叉王　岡本綺堂　一七四

——目次終——

廣島大學圖書之印

溝口白羊　本名駒造。文學者。詩人。大阪の人。明治十四年生。

代々木　東京市淀橋區にある地名。

女子新國語讀本　巻四

一　明治神宮

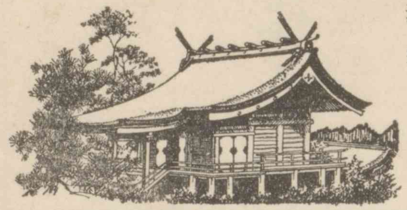
溝口白羊

快美な色彩の反射と、柔らかい感觸とを有つ秋の陽光に包まれてゐる代々木の森！　私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら、幾度其處を通つたことだらう。　森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。　或時は、

六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲で森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだ！　さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、生みの親の墓に對するやうな強い懷かしさで充溢された。そして、毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つていくのが、堪らない程嬉しく思はれた。

その明治神宮がたうとう竣工した。　嘗て赤い土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも列んで、烈しい



流造

日に光つてゐるのが見えた處には、今、清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にやらすつかり見違へるほど美しい景色になつて、森嚴と幽邃の趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造(ながれづくり)素木(しらき)の神殿の見えつ隱れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域！　眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土。　私は始めて完成した明治神宮の御苑に立つた時、その改まつた光景を見て、今さらのやうに强烈

な感激に打たれた。何者の力が、この新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隱れた部面に働いた強い力こそ、實にこの明治神宮の基礎を千載不動の固さに築き上げたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖德と、海よりも深い昭憲皇太后の御懿德と、そして、この二柱の大神の惠に對へ奉る國民の至純な感謝の心情と、この三つのものが陰に陽に工程を捗らせて、遂にこの記

念すべき大工事を完成するに至らせた原動力であることは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實である。

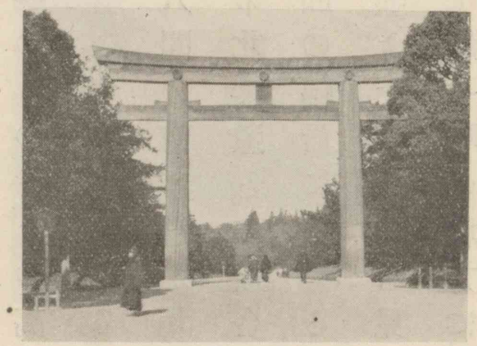
嗚呼！　純粹な至誠の動機から出た青年團員の造營奉仕、百里二百里の遠方から、眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實にこの神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。かうして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。なんといふ美しい尊い事實であらう。今までの神社に曾て見たことのない明治

萬成　岡山市内の西北にある萬成山。

神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一にこのことを直感した。そして、一歩々々美しい小砂利の上を神殿に近く踏み入るに隨つて、いよ〳〵肅然たる心持になつて、深く襟を掻き合はせた。

參道の兩側には、盡きることを知らない密林が何處までも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて、神橋の處へ來ると、どこからともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山縣萬成產の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見

筑波山　茨城縣にあり、海拔八七六米。



明治神宮大鳥居

ると、溪流の趣を模した風致のいゝ細流の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が今しも紅葉の影を水面に落して美しい秋の錦を織つてゐる。こゝは神苑中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總てが、纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木のたえた處に、千七百四十といふ驚くべき樹

原宿・千駄ヶ谷　共に東京市淀橋區にある地名。

土佐繪　土佐權守春日經隆の創始した畫風。

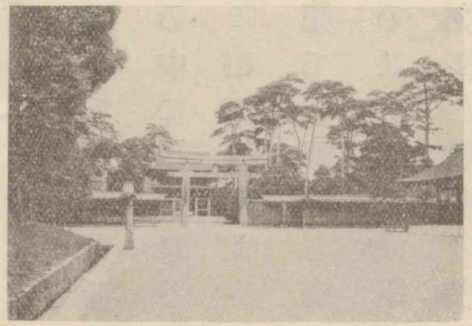
齡を重ねたといはれる、直立五丈餘の臺灣產檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、その高さは三丈九尺に達するとのことだ。

この鳥居のある處は、南方原宿方面から來てゐる幅員八間の南參道と、北方千駄ヶ谷方面から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、こゝから左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

木曾　長野縣西筑摩郡にある木曾山。

何事の云々　西行法師の歌。

御社殿は、樓門・拜殿・本殿等の建造物を併せて、その總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林產の檜材を以て造られてある。近く拜殿に登つて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、いかにも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奧は、卽ち神靈のおはします內院で、衆庶のみだりに窺ふことを許されない神聖な場處である。



明治神宮御社殿

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

私は、默禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、なんといふ明るい快い感じをもつた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な、しかし陰鬱な感じをたゞよはせてゐる中に、この神宮ばかりは、隱す處のない心持で、十分な光線に總てを解放し、總てを暴露して見せてゐる。然も、それでゐて決して淺露な心持はせずに、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな強い威力が迫り寄るのを覺える。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀し

た宮だといふことが出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠まつてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して新文明を吸收しようとお努め遊ばされた明治天皇の活動的進取的の闊達な御氣象に對して、この明るいお宮の感じが、いかにもぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。拜殿を中心にして左右に均齊を保ち乍ら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして、その奧に便殿の遠く望まれる心持、それら總てが又たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亙る森林帶があつて、その向ふ、廣く開けた明るい視野の中に、目

の覺めるやうな芝生地が一面に綠の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、また莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。こゝらに來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶び、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目に着く。寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間さうした色彩が續いてゐる。

明治神宮寶物殿

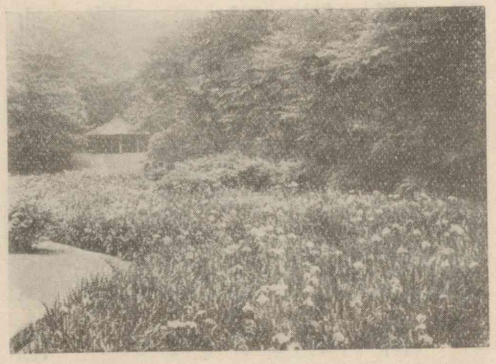
寶物殿は形式を中古時代に取り、その材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用した八幡製鐵所製の鐵材は、約十二萬貫に及んだといはれてゐる。後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を繞つて、若々しい楓の樹が美しく植ゑ列ねてある。

私は寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の桝形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり、左右兩側にある古雅な木柵を繞らした一構は、卽ち明治天皇・昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、いづれも御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝで、殊更技巧を弄しないところになんともいへない

八幡製鐵所
福岡縣八幡市にある製鐵所。

しをらしく

優雅な趣致がある。　この御苑は、祭神二柱の御在世中、殊に御愛賞遊ばされた處で、高くそびえてゐる松を背景にした芝生の上に點在して、しをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連なりつゞいてゐる櫟や楢の雜木林にも、東京近郊では到底見ることの出來ない野趣がある。


舊御苑内の菖蒲

私は此等を一わたり拜見し廻つて、涙ぐましい程の强い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので、御門を出た。

振返つて見ると、神殿のあたりはもうすつかり深い靄に包まれて、黑々と晝でも暗い程生ひ茂つてゐる樹林の中をかつきりと切り開いたやうに、路線の白い色が暮れ殘つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、その神秘な境の中に、ほんのりと浮かんで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、何時までも長く鑄つけられたやうに殘つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な幽邃な優雅な神苑よ。　長い私の一生を通じて、果してこの深い印象を忘れる日があるだらうか。（明治神宮記）

北原白秋　名は隆吉。詩人。歌人。福岡縣の人。明治十八年生。

二　明治天皇の御製

北原白秋

明治天皇は現神としての大自覺に立たせられた。この神ながらの道に立ち、まことに聖帝として萬民の景仰を受けさせられた。その御製を拜するにまことに王者の御風格が、大御心を通じて、蒼穹のごとく、天日のごとく、十方四海に光耀してわたらせられる。歌がらといふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には鞠躬如たらねばならぬ。帝王と凡下とは自らにして違ふ。これは天意であつて、いかんとも爲すべはない。

あさみどり澄みわたりたる大空の
廣きをおのが心ともがな

御製は自らな歌調で、御歌所の歌調を遙かに超越しておはせられる。ある歌人が萬葉調でおはせられぬといふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製の御製たるところではないか。何となれば大帝の御製は實に大帝の御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て批判し奉るべきで無い。形式以上の大稜威がそのまゝの帝王調として流露し光被してゐる。私どものひたすら欽仰し奉る所以は實に茲に存するのである。

眞の王道こそは大帝の立たせたまうた絶對無二の天の道であつた。現神としての御自覺そのものが、既に一

の宗教でおはせられた。　御製を一々拜誦するに、その殆ど總てが皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を慈み、四海の和平を希ひ、異民愛撫の御聲ならぬはない。　これ我が國民の深く感佩し奉るべきところである。　大帝は、人たるの道、子たるの道、言の葉の道を、あくまでも實に卽いて御詠み遊ばされた。　その中には教訓中の教訓、道歌中の道歌として、純藝術以外の見地から拜せられる御製も少くないが、純藝術と拜し奉るべき御作品も亦頗る多い。　世の教育家・宗教家・道學家たちは、御製の眞純なる御風格を冒瀆し奉つて、その各自の道の爲に牽强附會してはならぬ。何となれば、大帝の御製は理趣のための理趣でなく、一に

王者としてのさながらの御詠歎であらせられたからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製によつて、大帝の御一面をうかゞひ奉つても、私はほと〳〵歌人としての大帝を思慕し奉るの情に堪へない。

誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる。　よつて私は敢て茲にその種の御製を謹鈔して、歌壇の人々の拜誦を希はうと思ふのである。

庭菊

この秋もところ〳〵にきくの花
うゑてたのしむ九重のには

をりにふれて

庭のおもは若葉しげりてすゞかけの
花さく頃となりにけるかな

朝顔

しばがきにまとひあまりて荻の葉の
末にもさけり朝顔の花

秋風寒

宮のうちもふくかぜさむくなりにけり
山べはいまや時雨ふるらむ

土筆

庭のおもの芝生がなかにつく〳〵し
植ゑたるごとくおひいでにけり

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらむ
庭の薄もほにいでにけり

をりにふれて

冬がれの芝生の菫さきにけり
小春の日影さしわたりつゝ

雨中萩

すゑまではまださきみたぬ秋はぎの
花うちみだり村雨ぞふる

禁庭萩

昔わが折りてあそびしはぎの戸の
花もこのごろさかりなるらむ

秋月明

ともしびをかゝげぬ方に來てみれば
いよ〳〵あかし秋の夜の月

里

うつせみの代々木の里はしづかにて
都のほかのこゝちこそすれ

をりにふれて

かちどきをあげてかへれる軍人
まぢかく見るがうれしかりけり

菫

をさな子につませまほしと思ふかな
菫花さく庭をめぐりて

子

思ふ事おもふがまゝに言ひいづる
をさな心やまことなるらむ

蝸牛

世のさまはいかゞあらむとかたつぶり
をり／＼家をいでゝ見るらむ

田家雨

軒あさきしづがふせやは降る雨も
たゝみのうへにうちしぶくらむ

電燈

あきらけき火影ひきたる庭みれば
雨はふりながら月夜なりけり

見花

高殿の窓てふまどをあけさせて
よもの櫻のさかりをぞみる

何等の滯りもあらせられぬ。その思無邪は天の思無邪である。良寛の歌はいゝと云ふ。併し、良寛以上に大帝の御製は眞率で無心であらせられる。良寛は天成の

思無邪　「詩三百、一言以テ之ヲ蔽フ。曰ク、思邪ナシ。」（論語）

良寛　俗名山本榮藏。越後出雲崎の歌僧。天保二年（二四九一）歿、年七十四。

童心者であつたであらう。併し、かの無思邪の境涯は禪家としての修道と忍苦とから更に深められて、始めて幼子の心に還つたものに違ひない。大帝は自らそのまゝであらせられる。禪家の悟入やそれに附き纏ふいやみが些かもあらせられぬ。この純眞無垢こそは天意である。良寛の歌を渴仰する歌壇にかくの如き大帝の御製のある事を恭禮しまつらないのは不思議である。

所謂大古にして大新、蕩々乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御心であらせられるものを。

（季節の窓）

棚橋絢子（あや）　教育家。東京高等女學校長。大阪市の人。天保十年（二四九九）生。

棚橋絢子

三　菊と婦人

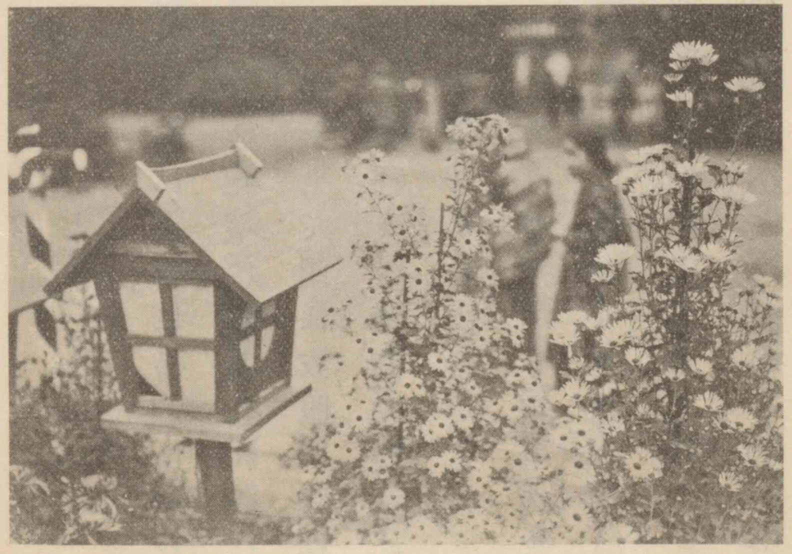
棚橋絢子

菊の花が、歌に詠まれ、詩に作られ、文章に書かれ、挿花にされ、花壇に植ゑられ、或は繪畫として、或は衣服の模樣として、種々の裝飾や娯樂に供せられるのは、昔からのことであります。さうして、永い年月に亙つての此の花の培養の結果は、殆ど理想的のものを作り出しました。これを人間に喩へますれば、模範的婦人であらうと思ひます。

紫式部　藤原宣孝の妻。平安朝時代の女流文學者。

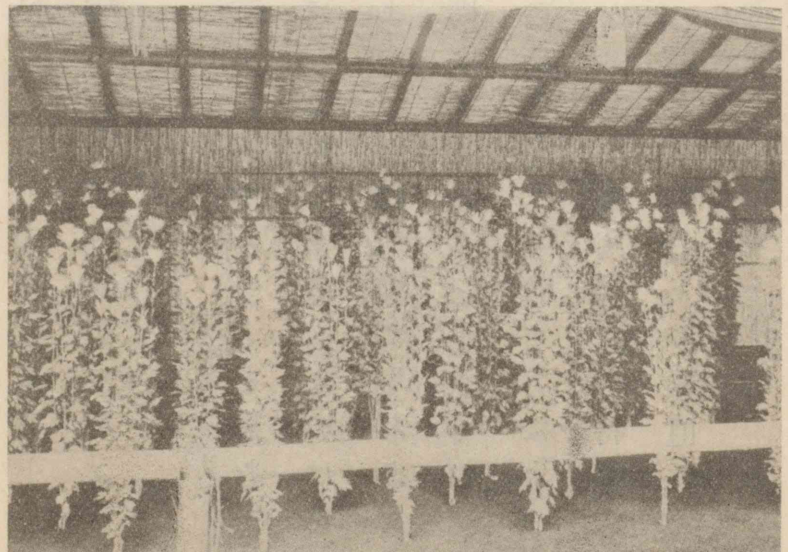
これが比を古人に求めますれば、辛うじて紫式部ぐらゐがこれに當りませうか。

天地間の美は多く花に集り、花の美觀は千姿萬態でありますが、菊の花のやうに、色彩が豊富で、香氣が芳しく、風姿が高尚優美で、生命の長いものはありますまい。



菊花

また菊の花のやうに、紅白濃淡さま〲な清い美しい色を有するものはありますまい。さらに菊の花のやうに、嗅感を痛めない、程のよい清香を送るものもありますまい。然も風姿が優婉で、高ぶらず、僻まないのが、やがて皇室の御紋所となつて、竹の園生に



菊花

影を現す所以でありませう。ダリヤなども美しいには相違ありませんが、其の姿からして到底菊に及ぶことは出來ません。

また菊は其の本末が直く、歪み曲ることを忌むものであります。さうして、菊ほど柔順で素直なものはありますまい。培養の方法によつては如何樣にもなります。大きな輪の菊の花でも、構はずにおくと小さくなりますが、其の反對に、小さい輪の菊の花でも、育て方によつては隨分大きくなります。かやうに、菊は婦人の特性、殊に柔順の德を表してゐます。婦人はもとより素直で柔順でなければならぬのであります。

中西悟堂
詩人。金澤市の人。明治二十八年生。

四 秋空

中西悟堂

秋空はみどりにひろがり、
深くふかく
やはらかく
私たちの上に君臨する。
樹樹のすがたの明らかさよ、
人人のすがたの親しさよ、
豐かにつらなる大地のかなた

地平から地平へかけて
優しく蒼く
天空はひるがへり、
光と共に
宏大な幸をふりそそぐ、
あらゆる人人の
あらゆる先祖たちから
私たちに至るまで常に優しかつた天空、
永劫(えいごふ)にわたつて

儼(げん)として光輝に滿ちてゐた天空の
永い深い心が、
今、秋に澄んで
喨喨(りやうりやう)と鳴りわたるやうに
私たちの上に笑ひ、
私たち、さわやかさに充てる者らは、
野の光をつらぬいて歩きながら、
明快な樹の下に憩ひながら、
よき天空を讃嘆する。

五十嵐力
文學博士。早稻田大學教授。國文學者。米澤市の人。明治七年生。

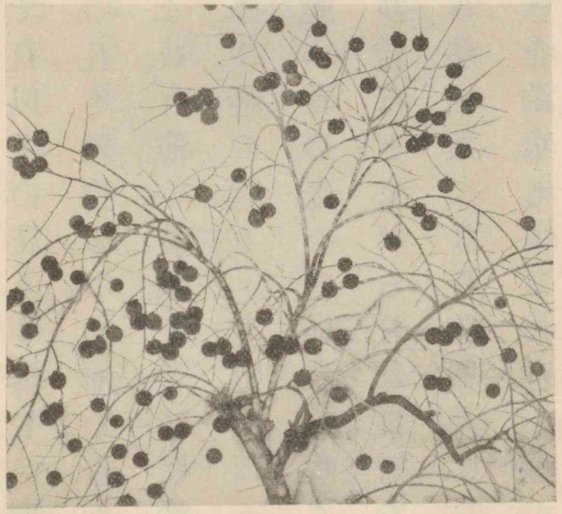
五 柿

五十嵐力

我が家の庭には六本の柿がある。その一本は名を衛門と云つて、澁柿の中の大將株と云はれるものである。普通樽柿にするのがこれで、若い中に澁を拔けば、さくさくと齒がかりのあるのが食はれる。やゝ熟したのをさはせば、もや〳〵と柔らかいのが食べられる。霜に飽かして黑味を帶びるやうになつたのをもいで來て、棚に並べて澁の拔けるのを待てば、甘露の凝つたやうなのが啜られる。

私が此の木を植ゑたのは、明治四十年の秋であつた。

高さはやうやく一間餘り、幹は子供の腕ほどのものであつたが、何となく萎縮けたやうで、枝も伸びず、花もろくろく咲かず、隨つて實も結ばない。もどかしさに枝先を剪り込みなどして生氣の回復するのを待つて居るうちに、新しい土地に緣づいて固くなつたしこりが段々ほぐれて來たと見えて、三四年目から盛んに花をつけ出して來た。そして一昨年は、申し譯のやうで



柿（柳原苔山筆）

はあつたが、とにかく一箇の大きい實を結んだ。それが去年は二十幾箇を結ぶやうになり、今年は大飛びに飛んで、百以上の花より美しい實を見せるやうになつた。

凡そ果物の中で、柿くらゐ人の心を動かすものはあるまい。薄い黄味を帶びた透き通るやうな新芽は、袖や帽子や箒の觸るゝ度毎にぼろり〳〵と缺ける。其の中に脆い、首の長い、白い花が咲く。やがて實が見えて、それが豆粒ほどになると、毎日掃くやうに地に落ちる。それから慈姑大になり、鶏卵大になる。其の間をり〳〵豐富な秋を約束してゐた青い實が、頻りに枝を離れてぽたりぽたりとみじめな亡骸を地上に横たへる。秋になつて、もう大丈夫と胸を撫で下ろして居ると、やがて八朔・二百十日の大暴風雨が襲つて來て、大きくなつた實を容赦なく枝と共にもぎ取つて行く。赤い姿を枝先に現して人の目を悅ばすやうになると、今度は其の美しい色が鳥の目を惹き、惡太郎の心を惹いて、無殘な嘴や石ころに傷つけられる。

僅かに一箇・二箇ではあるが、半年の間に續いて起る斯樣な災厄を危く免れて私共の口にはひる貴重な一箇・二箇である。その一箇が一年にして二十箇となり、又一年にして百箇となるのを見る喜びを何に譬へよう。　徒然草の兼好法師は「此の世のほだし持たらぬ身に、たゞ空の

兼好法師　吉田兼好。本姓卜部。鎌倉時代の文學者。正平五(二〇一〇)年歿、年六十八。

此の世のほだし云云　徒然草第二十段。

手しほ。

名殘のみぞ惜しき。」と云つて居る。私は世のほだしも澤山にもつて居るが、空の名殘、自然界の名殘、殊に手しほにかけた草木の名殘は、取りわけ私に取つて盡きせぬ未練である。「柿の未來を考へるだけでも死なれない。」と私が茶飲話によく云ふ戲談は、實に腹の底から湧き出る眞の私の聲である。

一本の名は鶴の子である。これは實の形や大きさが鶴の卵に似て居るからの名であらう。或は其の色が、あの品のよい大鳥の丹頂に似てゐるための名かも知れぬ。或は其の形が、嘴を縮め、翼を收め、足を隱した長丸い團栗式の鶴に似て居る爲の名かも知れぬ。此の柿の特色は、

早熟の點にある。堅い齒ざはり、水氣の乏しい味、いづれも人に舌鼓を打たせるほどのものではないが、九月に入る匆々、瓜に次ぎ無花果に並んで秋の味はひの先驅をする所に、他の後詰の優秀者の及ばぬ價値がある。青いながらに熟して高い秋の眞味を暗示するところや、こましやくれた相貌をして旗持・喇叭吹の役を勤めるところなども、いはゆる新人の生活を象徴してゐるやうに見えて、何とも云はれぬ面白さである。

我が鶴の子は衞門と一緒に四十年の秋に買つたので、もとは大人の拇指位のものであつたが、翌年から花を持ち、その翌年には數箇の初生を見せて、今ではもう、一年お

きに五十顆乃至百顆を結ぶやうになつた。年毎にずんずんとふとつて行くのを見ると、數年後の未來が待ち遠しさに胸も躍るばかりである。鶴の子のお馴染は、同じやうに未來に富んでゐる子供等で、皮ごとにむしやむしやと食べる無邪氣な仲間の喜びは、常に此の鶴の子に集つてゐる。

一本は名を禪寺丸といつて、黑砂糖式の甘味を持つた柿である。しかし、其の黑砂糖式の甘味は、場末の菓子屋の餅菓子に見るやうな味はひである。此の柿の味はひのとりえは、硬からずとろけざる間にある。古代風の黑ずんだ赤味を帶びて、柔らかいながら手ざはりのしなしなする丸々した奴に、皮ながらかぶり附いて、舊都式の甘味が齒に沿うて唇に流れ出るのを啜る時の心持は、實に類ひない風味である。少し尖りめのたつぷりした丸い形、厚味のある古代風の赤い色、柿の中で最も柿らしい外觀を備へたのはこの禪寺丸であらう。

一本は縞御所。これは名なしのまゝで買ひとつたので、私共は偶然にも養ひ親、兼名づけ親になることになつた。形は蜂屋そつくりで、蜂屋よりは少し小さく、皮に美しい青みがかつた縞があり、そして甘露を啜るやうな味は、品のよい御所柿そつくりである。年々なる數は極めて少いが、色と形と味との三方面に於て、類ひなき高尙な

趣味を見せてくれるのはこれである。

私は他日、植木屋から、或は果物屋の店頭から、或は書物から、此の柿の本名を知ることがあるかも知れぬけれども、少くとも我が庭に於ては、長く縞御所の名を改めたくないと思つて居る。

一本は妙丹といふので、私の家では又梨柿とも呼んでゐる。黄味の勝つた赤色で、平たい、大きい、尖頭の窪んだ、そして熟すると、笑みわれるといふ特色を持つて居る。味はひ盛りは張切つてまだ笑みわれぬ境にある。硬性が極度に發達して、まだ柔性に轉ぜざる頃合ひにある。ナイフを當てれば、ばりつと彈けて割れ、齒に掛けると、さ

三四年前　大正五年より。

くさくと梨子を食ふやうな音がする。そして多量の水氣を含んで、ざらめ糖のやうな淡泊な上品な甘味がする。色といひ、形といひ、味といひ、禪寺丸や衞門や縞御所とは全く反對してゐるが、同時に他の種類の全く眞似られぬ特殊の風味を持つてゐる。柿の中の最も柿らしからざるものであるが、しかも捨てがたい味を有つたものは是である。

大正天皇がまだ東宮におはした時に、此の柿を好ませられて、遙かに濃尾地方から御取寄せになつたとかいふことを三四年前聞いたことがあつた。我が庭に養はれて、やんごとなき新しい縁故をもつて居るのも、また此の

柿である。

最後の一本は、まだ名を持たない。名を持たずに養はれて來て、未だに名を與へられずにゐるのである。此の柿は六本の中で最年長者で、幹も一番太つて居るが、買ひ取られてから七年になりながら、今に一箇の實をも見せた事がない。察するに、大きくなつた養子が養家に馴染まぬやうに、里離れの苦痛に心を取られて、まだ新しい土地に順應し得ぬのであらう。痛ましい事である。が一つ怪しいのは年々多くの花を見せることで、枝一ぱいに穢いほど咲きながら、つひぞ一つの實をも止めぬのはどういふ心であらうか。私は此の一本に對してしば〳〵

特別の手當を施した。寒肥も多くやつた。二三度も枝先を剪りこんだ。冬は鹽俵で根本を包んで寒氣を防いでやり、夏は棕梠の毛を幹に巻いて蟻を防いでやつた。それから五六年になるが、未だに何の反應もない。私は彼を買ひ取つた其の年から、一度實を見て名をつけようと待ちかまへてゐる。彼は遂に名無くして一生を終るのであらうか。年々夥しい花を見せるのみで、遂に一箇の實をも結ばぬのであらうか。たゞしは氣永に我が心遣ひの厚薄を試みた後に、大器晩成の大豊饒を以て報いるつもりであらうか。名無き柿よ、汝は我が庭の謎である。

此の外にも我が庭に迎へようと思ふ柿は數々ある。甘露の凝つたやうな味をもつた御所柿もその一つである。御所柿に似て更に大きい百目もその一つである。先尖りの楕圓の大きな實で、風變りの濃密な味を與へる蜂屋も其の一つである。木が痛々しく見えるほど枝を撓めて、隙間もなく眞赤に實のる身不知もその一つである。徑四寸程の素晴しく大きな實に凡ての仲間を壓倒して日本一を誇るやうに見える開山もその一つである。

柿は其の實の色と形と味との凡てにおいて、我が秋の庭に於ける主人公である。私は曾て我が庭に柿の字の扁と旁とを續けて木市園と名づけた事があつた。木の

市に圍まれて、綠の空氣を十分に吸ふ事が出來れば、私の半分の望は足りる。柿の木に蔽はれて甘い實を十分に味はふ事が出來れば、他の半分の望は足りる。菜や大根や蕪の葉を隙間もなく敷き詰めた綠の絨毯を地上の背景とし、高く澄んだ青空を天上の背景として、無骨な柿の木に眞紅の瓔珞を綴る柿よ、花紅葉の美觀と果物の美味とを併せ與ふる柿よ、秋の趣味の凝つて成つたやうに見える柿よ、汝は我に取つて秋の旗標であり、そして秋の王である。

（我が書簡）

德富蘆花 名は健次郎。小説家。熊本縣の人。昭和二年歿、年六十。

六 我が家の富

德富蘆花

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪。誰か言ふ「狹くして且陋なり。」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狹しと雖も仰いで碧空を望むべく、步して永遠を思ふに足る。

德富蘆花

神の月日は此所にも照れば、四季も來り、風・雨・雪・霰かはるがはる至りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

くちなし

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開きて樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ちら〳〵と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。

隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を着く。子細に見れば桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株のくちなしあり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の梧桐あり。碧幹亭々として少し

山茶花

蛻　巖
梁田蛻巖。明石藩の儒者。寶暦七年(二四一七)歿、年八十六。
蛻巖の九月九日の詩。

のゆがみなく、我が如く直かれと教ふるに似たり。梧桐と手水鉢の側なる八手とは葉闊うして、我が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つく〳〵ぼふしの聲に世は何時しか秋に入りて、山茶花咲き、三尺許りの楓も紅に燃え出で、唯一株、前の家主の植ゑ殘したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しと言ふとも、秋のあはれ閑寂の趣は、却つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁ならば「獨り憐む細菊荊扉に近きを。」とや吟ぜん。恥づらくは「海内の文章布衣に落つ。」と唱すべ

き身にあらざる事を。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして滿樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翩々として飜り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、所として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人は言ふなる錦を、我は庭に敷き詰めぬ。

木の葉落ち盡くしては流石に寂しげなれど、日影・月影愈、多くなりて、空を見、星を見るに障り少きは嬉し。

（自然と人生）

夏目漱石 本名は金之助。英文學者。小説家。東京市の人。大正五年歿、年五十。

七 霧の倫敦

夏目漱石

昨夜は夜中、枕の上で、ぱち〱いふ響を聞いた。これは近處にグラハムージャンクションといふ大停車場のある御蔭である。このジャンクションには、一日のうちに汽車が千幾つか集つて來る。それを細かに割り附けて見ると、一分に一列車ぐらゐづつ出入りをする譯になる。その各列車が、霧の深い時には、何かの仕掛で停車場間際へ來ると、爆竹のやうな音を立てて相圖をする。信號の燈光は、青でも赤でも全く役に立たないほど暗くなるからである。

寢臺を這ひおりて、北窓の日蔽ひを捲きあげて、外を見おろすと、外は一面にぼうとして居る。下は、芝生の底から、三方煉瓦の塀に圍はれた一間餘の高さに至るまで、何も見えない。たゞ空しいものが一杯詰つて居る。さうしてそれが、しんとして凍つて居る。隣の庭もその通りである。この庭には綺麗な芝生があつて、春先の暖かい時分になると、白い髯をはやしたお爺さんが、日向ぼつこをしに出て來る。その時このお爺さんは、何時でも、右の手に鸚鵡を留らせて居る。さうして自分の目を鸚鵡の嘴でつゝかれさうに近く鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、頻りに鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を曳いて、間斷なく芝刈器械を芝生の上に

煉—練—錬

ゴシック　西洋建築の様式の一、その特長は、アアチの上端、高塔の頂。皆鋭く尖つて、天を衝く趣きがある。

轉がして居る。この記憶に富んだ庭も、今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿のそれと、何の境も無く、のべつに續いて居る。

裏通を隔てて向ふ側に、高いゴシック式の教會の塔がある。その塔の、灰色に空を刺す天邊で、何時でも鐘が鳴る。日曜は殊に甚だしい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石を不揃ひに疊み上げた胴中さへ、ありかがまるで分らない。それかと思ふ處が、心持黒いやうでもあるが、鐘の音はまるで響かない。鐘の形の見えない濃い影の奥に深く鎖された。

表へ出ると、二間許り先は見える。その二間を行きつ

バス　乘合馬車。

くすと、また二間許り先が見えて來る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩くほど、新しい二間四方が現れる。そのかはり、今通つて來た過去の世界は、通るに任せて消えて行く。

四つ角でバスを待合はせて居ると、鼠色の空氣が切り拔かれて、急に眼の前へ馬の首が出た。それだのに、バスの屋根に居る人は、まだ霧を出きらずに居る。此方から霧を冒して飛び乘つて下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりして居る。バスが行き逢ふ時は、行き逢つた時だけ、綺麗だなと思ふ。思ふ間も無く、色のあるものは濁つた空の中に消えて了ふ。漠々として無色の裏に包まれて

行つた。ウェストミンスター橋を通る時、白い物が一二度眼を掠めて翻つた。眸を凝らしてその行方を見詰めて居ると、封じ込められた大氣の裏に、鷗が夢のやうに微かに飛んで居た。その時、頭の上で大時計が嚴かに十時を打出した。仰ぐと、空の中でたゞ音だけがする。ヴィクトリヤで用を足して、テート畫館の傍を河沿ひにバタシーまで來ると、今まで鼠色に見えた世界が、突然と四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く身の周圍に流したやうに、黒い色に染められた重たい霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふほど濕つて居る。薄い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足許は

無論穴藏の底を踏むと同然である。

自分は、この重苦しい茶褐色の中に、暫く茫然と佇んだ。自分の傍を人が大勢通るやうな心持がする。けれども、肩が觸れ合はないかぎりは、果して人が通つて居るのかどうだか疑はしい。その時、この濛々たる大海の一點が、豆ぐらゐの大きさに、どんよりと黄色く流れた。自分はそれを目標に、四歩ばかりを動かした。すると、或店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中では瓦斯を點けて居る。中は比較的明らかである。人は常の如く振舞つて居る。自分はやつと安心した。

バタシーを通り越して、手探りをしないばかりに、向ふ

の丘へ足を向けたが、丘の上はしもた屋ばかりである。同じやうな横町が幾筋も並行して、青空の下でも紛れ易い。自分は向つて左の二つ目を曲つたやうな氣がした。それから二町ほど眞直ぐに歩いたやうな心持がした。それから先はまるで分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けて居た。右の方から靴の音が近寄つて來たと思ふと、それが四五間手前まで來て止つた。それからだん〳〵遠退いて行く。仕舞には全く聞えなくなつた。あたりはしんとして居る。自分は、暗いなかにたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。

（漱石全集）

新渡戸稲造　農學博士。法學博士。貴族院議員。岩手縣の人。昭和八年十月歿、年七十一。

夢想兵衛　瀧澤馬琴の「夢想兵衛胡蝶物語」の主人公。

和荘兵衛　遊谷子の「異國奇談和荘兵衛」の主人公。

八 國際的標準

新渡戸稲造

新渡戸稲造

七十年前フランスの小説家が「八十日間の世界旅行」を書いた時は、讀者は之を學術上の豫言とは思はなかつた。一種の空想として、我が國の夢想兵衛が凧に乗り、和荘兵衛が鶴や龜に乗つて、世界各國を巡回した物語と同様に見られた。然るにその後汽車汽船が發明されて、八十日はおろか、その半分もあれば、我が地球を一周することが出來るやうになつた。三年

前一米人が企てた世界一周は、日數二十八日と六七時間を要したと記憶する。今後飛行機の發達でこの日數が半減されるに違ひない。五年前ある英國人の計算した所に依ると、ロンドンと東京の普通の通路(最良の汽船の航路)に依れば五十日を要するが、シベリア鐵道に依れば十八日で間に合ふ。然るに現に公開されてある飛行機を利用すれば、十日でゆつくり日本に來られると云ふ。このやうに各國の距離が縮小すれば、風俗・習慣等も自然に相互に近づいて來ることは明らかである。強ひて世界から孤立しようとすれば、却つて個人にしても國家にしても損失を招き、存在を危うする。解り易い例を擧

げて言へば、我が國、開國の當初は、金銀の價の比は四と一の割合であつたが、西洋諸國では十六と一の比であつた。それで西洋人は爭うて銀四を以て金一に替へ、その金を本國に送つて、金一を銀十六に賣つて巨利を貪つた。それが爲に金のどし〳〵外國に流出するのを防止しようとして幕府は大いに苦しんだ。かく自國の標準が世界の標準と大いに違へば、國は損失を蒙るのである。美術品にしてもさうである。明治の初年美術が廢り、又神佛混合が廢せられた時、寺院や佛像を顧みるものなく、大きな佛像を砕いて薪に燒いたり、奈良の五重塔を五十圓で賣り渡さうとした時代には、日本の美術の標準が全然狂

つたから、作のよい物は外國人に買ひ占められて、近頃になつて之を買ひ戻すに大いに苦心してゐる人がある。これも一時たりとも我が國の美術鑑賞の標準が、世界の標準とあまりに懸け離れたから起つたことである。

聞く所によれば、郵便切手の色は各國政府の勝手に定めるものであるが、萬國郵便同盟に於て、何れの國も自國用の(日本なれば三錢、米國なれば二仙(セント))切手には赤色を用ひ、外國用の(日本なれば十錢、米國なれば五仙)ものには青色を用ふる發議があつたので、多數の國はその通りに實行するに至つた。郵便切手の色を統一することは些事(サジ)ではあるが、郵便局で郵便物を捌(サバ)くに、一々名宛を讀まず

に內外の區別をなし得るのみでも、少からぬ時間が節約されて、或人の計算に依れば、世界各國がこの切手の色を定めたために省けた手數を、費用に換算すると、毎日數百萬圓に上ると云ふ。

又螺旋(ねぢ)の大きさは、懷中時計に使ふものから造船或は建築に用ふるものまで、大小さま〴〵ある。且その材料も金・銀・鋼等種々の金屬である。故に螺旋の種類は四萬もあると聞いてゐる。それで只一本の螺旋を失つても、これを補ふには何處の國の何の會社の何の原料の何番なるかを明らかにせねば補ふ事が出來ない。然るに數年前、世界各國の螺旋の製造家が國際會議を開いて、世界

共通の標準を定めた爲に、何々製の何番と云へば、何處の國にでも解るやうになつて、螺旋を使ふ人の便利を得たことは多大なものである。　藥についても同じ事がある。

同じ名を有する藥が獨逸製と佛蘭西製と日本製とでは、皆その要素と分量が違ふから、その使用が實に危險である。　故に近頃は大事な藥は世界的にその標準を定めるに至つた。

世界共通の標準を必要とするものは、右に述べた如き物質的の事柄にのみ限らない。　學問に就いても何か一般的の制限を設けなければ、甲の國の大學者も乙の國では認められず、同じ名稱の學位でも、國々の標準が異なれば、國外に於ては十分な信用も威嚴も保ち得なくなる。故に現に國際聯盟の知的協力委員會に於ては學位の標準に就いて各國の制度を調べてゐる位である。　これに就いて思ひ出すが、書物の大きさも統一する必要があるまいか。　今日のやうに一國で出版した書物があらゆる文明國に傳播さるゝに當つて、書籍の整理上其の大きさに一定の標準があれば便利なことは、何れの圖書館に於ても切に感じて居ることである。　或人の如きは、學問に

就いて書物の大きさなり、或は表紙の色なりを一定したら、それ丈でも圖書館の爲には少からぬ勞力が省けるであらうと言つた。

斯くの如く如何に小さくともそれに依つて國と國、國民と國民とが、互に睦み交り親しむ方法が增せば增す程、人類の共同協力が行はれ、從つて幸福が增す故に、賢明なる國民は、努めてかゝる方法を考へだすべきである。

（東西相觸れて）

山田邦祐　美術批評家。福岡縣の人。

九　落穗拾ひ

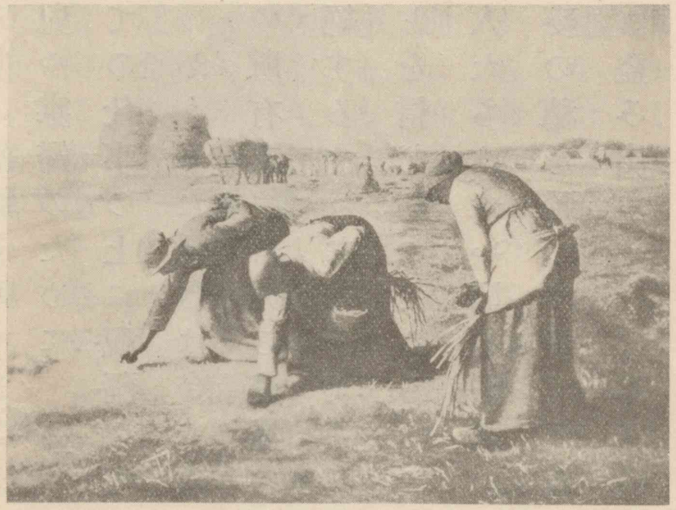
山田邦祐

廣い農場は今刈入の最中である。金色に稔つた小麥が刈り取られてゆくと、男や女、すべての農夫たちが、絶えず忙しさうにそれを集めてゆく。一方では、それを束ねる農夫たちがゐて、瞬くうちに小麥の束をこしらへてゆく。その束は四輪馬車にうづ高く積み込まれて、農場近くの納屋へと運ばれてゆく。そこには刻々に小麥の山が築かれてゆく。眼を轉ずると、農場の遙か彼方を馬に乘つた監督が驅け廻りながら、農夫たちに指圖をしてゐるのが見える。

さうしてゐるうちに、落穂拾ひの人たちが農場にあらはれて來て、そこら一面に撒き散らされてゐる小麥の落穂を拾ひ集めにかゝるのである。この習慣はずつと昔からあるもので、誰がこの落穂を拾ひに來ても、農場では別に抗議を申し出るやうなこともなく、公然の一つの仕事となつてゐるやうである。これに關しては、古のヘブライ人の間には、一つの嚴肅な宗教的の解釋があつた。
「汝が、汝の農場を收穫をする時には落穂拾ひの人たちを厄介拂ひしてはならぬばかりでなく、さういふ人たちに、自由に落穂を惠まなくてはならぬ。貧しき人々や旅人の群に落穂を與へることは、汝等の一つの義務である。」

又これに關して、更に他の解釋があつた。「落穂拾ひは孤兒や寡婦のために。さすれば、主なる汝の神は汝のすべての仕事の上に祝福を垂れるであらう。」

かうした風習は、今も尚フランスに遺つてゐて、小麥畑の所有主は、自分の農場の刈入あとの落穂拾ひを、若し拒絶するやうなことがあれば、必ず凶作に出會ふといふことを信じ切つてゐる。こゝに面白いことは落穂拾ひの人たちは、永い間の習慣上の訓練から、白晝に限つては小麥の穂を拾つて歩くが、夜陰に乘じて小麥の束をそのまま盜み出すやうな不正直者を、未だ曾てその仲間から出したことがないといはれてゐる事である。



落穂拾ひ（ミレー筆）

夏の晝近くである。太陽は照りかゞやいてゐる。落穂拾ひの足もとの影が短い。この落穂拾ひは三人の貧しい百姓の女たちである。彼女たちはお粗末ではあるが、仕事着をきちんと身につけ、頭巾で髪を包んでゐる。額の影が眼のふちを隈どつてゐる。着物の襟は頸のあたりで

手頃にくりぬかれて、風通しがよささうに見える。かうした扮装をした彼女たちは、針のやうに鋭い刈株の跡を踏んで、貴い小麥の穂を集めながら、あちらこちらと歩を移すのである。絶えざる努力に依つて、拾ひ集められた落穂は、いくつもの小さい束となり、次ぎ／＼に足もとに積み重ねられてゆく。

私たちは、この三人の農婦たちを、更に細かく觀察して見ることも面白いと思ふ。彼女たちは、――娘・母親・老婆とそれ／＼に年が違つてゐるのを見出す。一番近く、右側に中腰に立つてゐる女が、三人のうちでは年長者であることがわかる。老婆は、長い間立ちつゞけてゐること

ケープ 肩マント。

が堪へられないと見える。おそらく腰もこはばつてゐるのであらう。如何にも仕事をつゞけてゆくのが大儀さうに見える。その次の中央の農婦は、如何にも岩乗さうなからだつきで、がつちりとした物腰は重い荷物でも平氣で背負ふだけのゆとりが見える。その太い丈夫な腕は、どんなきつい仕事でも成しとげられさうである。三番目の、左側の若い農婦は、極めてしなやかな風情があつて、どう見ても娘々してゐる。顔かたちから、頭巾の恰好、輝く太陽の光をさけてゐる頸筋の小さなケープなどから見ても、娘らしい情味がある。二人の年かさの農婦はエプロンの端を折り曲げて、それに一々落穂を入れて

ゐるが、この娘は他の二人のやうにエプロンをつけてゐないで、拾ひ集めた落穂は皆これを手に握つてゐる。

更に、この三人のそれ〴〵の動作に眼を移すと、三人が三人とも如何に違つた動き方をしてゐるかが容易にわかるであらう。エプロンの中に拾ひ集めてゐる二人は、握りしめた小麥の穗をもつた左手を一々その膝のあたりに休めて、進みながらも絶えずこの不器用な動作を繰り返してゐる。娘の落穂拾ひは、極めて敏捷に右手で拾つた麥穂を左手に、そして左手は、これを背の上に移して休めてゆく。この動作は徒らにからだを疲らせることがなく、而も極めて美しい姿である。かうして大地

を見つめながら前進しては止り、止つては前進してゆく落穗拾ひの人たちを見ると、恰も野原を不規則に飛び移つてゆく大きな蝗のやうでもある。私たちは、この三人の農婦の姿を見てゐると、皆が私たちの方へ今にも動き出して來はしないかと思はれるほどである。

この繪は、誠に線に於て美しい出來榮えを示してゐる。中央の農婦はぎこちない輪郭から成り立つてゐる。この生硬な線は胸部から右手の角度の線にあらはれ、更に顎と頸との角度にも、髪を包む頭巾のうしろの線にもあらはれてゐる。私たちは、かうした強い線によつて描き出された中年の農婦その人のもち味の不趣味さをさへ

感ぜさせられるのである。これに反して、若い農婦は美しい曲線で描かれてゐる。胸の線と背中の線とが、互に快い圓味を見せて楕圓形を形づくり、それが左手の線によつて、より完全な效果をあげ、更にさし延べられた右手の線が、背中の線と延びつゞいて美しい線を見せてゐる。その他、可愛らしい咽喉の曲線、手の整調、頭巾の恰好よさなど、すべて處女の姿の魅惑を有つてゐる。

年老いた農婦の立像を描く線は、他の二人の農婦の方へ曲線をなしてゐるが、構圖の上から見て、この線の示す高さは、小麥の積み上げられた山の形とは違つた效果で、畫面全體のいゝ占めくゝりをなしてゐる。小麥の堆積

の山は遙か彼方の野面の中央に見えるが、その小麥の山の頂の線は、腰をかゞめた二人の農婦の背中の線と調和を保つてゐることも、注意しなければならぬ技巧であらう。

私たちは、この繪を他の作品と比較するときに、同じやうな構圖を見出すであらう。——前景に人物を置き、遠景に地平線を描くといふやうな場合の構圖がそれである。然し、私たちはこの繪に於て、落穗拾ひの背景をなす遠景の如何に微に入り細に入つた描寫であ

晩鐘（ミレー筆）

るかに氣附く筈である。更に「晩鐘」や「羊飼の女」と比較して見る場合に、前景の人物が地平線の上にまで拔け出てゐないところに、この繪の特色を見出す筈である。

この繪は「晩鐘」と同じやうに、ミレーの作品のうちでも、最もよく知られてゐる傑作のうちの一つで、一千八百五十七年に、初めてサロンに展覽されたものである。現在はルーブル美術博物館に所藏されてゐる。

羊飼の女（ミレー筆）

ミレー　佛蘭西の畫家。西紀一八七五年歿、年六十二。

サロン　巴里に於て春季に行はれる美術展覽會。

ルーブル美術博物館　パリの中心セイヌ河の北岸に聳える世界有數の博物館。

鈴木鼓村　音樂及び音樂史の研究家。宮城縣の人。
團平　初代豐澤團平。義太夫節の三味線彈である。

一〇 玄妙の音

鈴木鼓村

「御免なさいませ、團平のお師匠さんはこちらで。」と、海松布(みる)のやうな着物を着た乞食が、或日初代豐澤團平が住居の格子先へ立つた。

「お何や。どなたかいらつしやつたやうだ、行つて御覽。」と、女房は煙管を下に置きながら、長火鉢の前から聲を掛けて、臺所に立働いて居る女中を呼んだ。

女中は濡れた手を前垂で拭きながら玄關に出た。さうして右の手で襷を外しながら敷居際に手をついて、障子をあけて來訪の客を見上げた。

「ちよつと、その何でございます、お師匠樣にお目通りを、へい〳〵。」と、蓬頭垢面(ほうとうこうめん)の物乞は、揉み手をしながら小腰を屈めた。

「あらつ。お前お貰ひぢやないか。おかみさん、お貰ひの癖に旦那さんに——まあ、どうでせう。」

女中は頓狂に叫んだ。

「何です、騷々しい、どうしたといふの。」と、女中の仰山な聲に釣られて女房も出て見た。

「このやうな服裝(みなり)を致しまして、誠にはや何でございますが、どうぞ一生のお願でございますので——へい、お師匠樣にちよつと。」

「そんなことは出來ません。早く行つて下さい。それに何用か知らんがお師匠様もお留守です。さつさと行つて下さい。」女房は顔をしかめた。

「そこをどうか、一生のお願でございますので。」と、乞食はしつこく動きさうもない。

「何だ、騷々しい。」と、主人の團平は襖から、身體半分を出して玄關を見た。

「あなた、まあどうでせう。お師匠様にお目にかゝりたいなんて、ほんとに厭なお貰ひですこと。」と、女房の聲には角があつた。

やをら。

「なに、お客様か。」と、團平はやをら玄關口へ出ようとした。

「およしなさい、お貰ひですよ。」と、女房は良人の袖を控へた。

「なに、ちよつとお目にかゝりさへすれば、もうはや、この世に望もございませんので、へい。」と、格子先の聲にはうるみがあつた。

「一生のお願では、ゝあ。」と、團平はたまらず障子際に出てしまつた。

「へい、一生のお願でございまする。」

團平はつと進んで、その海松布のやうな着物の珍客を

ぐづ〱

見た。さうして慌てたやうに、
「これはようこそ御尊來。さあ〱、どうぞ。」と、自分で格子をあけて、
「こらつ、何をぐづ〱してゐるんだ。お洗足（すゝぎ）でも持つて來んか。」と、女どもを叱つた。さうして、今更のやうに恐縮がる乞食を通して、無理に上座に据ゑた。女どもは唯あきれて物もいひ得なかつた。
「むさい風體で、誠にどうも相濟みませぬわけで、へい。」と、乞食は座にえ堪へぬらしくもぢ〱してゐる。
「いや、どう致しまして。して御用は――。」と、團平は賓客に對する禮を崩さなかつた。

義太夫　義太夫節のこと。元祿の頃大阪の義太夫の創めた淨瑠璃節。

恥ぢる

「實はその突然の儀にございますが、私は至つて義太夫の三味線を伺ふのが好きでございまして、しかしまだその、何でございます、お師匠様のを伺つたことがございませぬので、それをば一生の願とはして居りましても、御覽のやうな、はや見る影もない態（ざま）で、何ともどうも――。」と、きれ〲の言葉に境遇を恥ぢる素振は現れて居るが、その熱心の態度は眼の輝きにも知られて、さすが古今の名人の心を動かすに十分であつた。
「さうですか、それはまあようこそ。よろしい、彈きませう。どうぞゆつくり聽いて下さい。おい、お茶とお菓子、それからお煙草盆はどうした。いや、どうも失禮な奴ば

浪花　今の大阪。

志度寺のお辻の最期　「花の上野譽の石碑」の一段。この淨瑠璃は田宮坊太郎の仇討を脚色したもの。

かりで。」と、團平は次の間に立つて、三味線を抱へて來た。

「誠にはや有難いことでございまして。」と乞食は感に堪へて居る。調律の撥音にさへ、浪花の街の動搖は靜つて、秋の午下りは夜半のやうだ。彈き出したは「志度寺のお辻の最期。」その水際立つた絃の音には、富貴もなく、貧賤もなく、人もなく、我もなく、三味線もなく、撥もなく、唯鳴りに鳴る玄妙の音ばかり。乞食の頬には涙が滂沱と傳はつた。

乞食は欣然として辭し去つて、行く處を知らなかつた。

それを飽かず〳〵見送つた團平の眼には、うるみがあつた。その名人の眼のうるみこそ、知己に遇つた歡喜と、二度と會はれぬ別離の悲しみとを語るものであつた。やがて室に歸つた團平は、藝人の妻としての不心得を責めて、離縁を申し渡したが、同輩・門弟等の詫でやうやく納まつたといふことである。その名人今は天に歸つて、不思議の音締はもう耳にすることが出來ぬ。

あゝ、音樂の天才、天才の伎倆は人と共に亡びてしまふ。併し、この美はしい話は永久に生命を持つであらう。

（耳の趣味）

大町桂月　名は芳衞。文章家。高知縣の人。大正十四年歿、年五十七。

太田道灌　足利時代の武士。扇谷上杉氏の家來。江戸城を築く。文明十八年(二一四六)歿、年五十五。

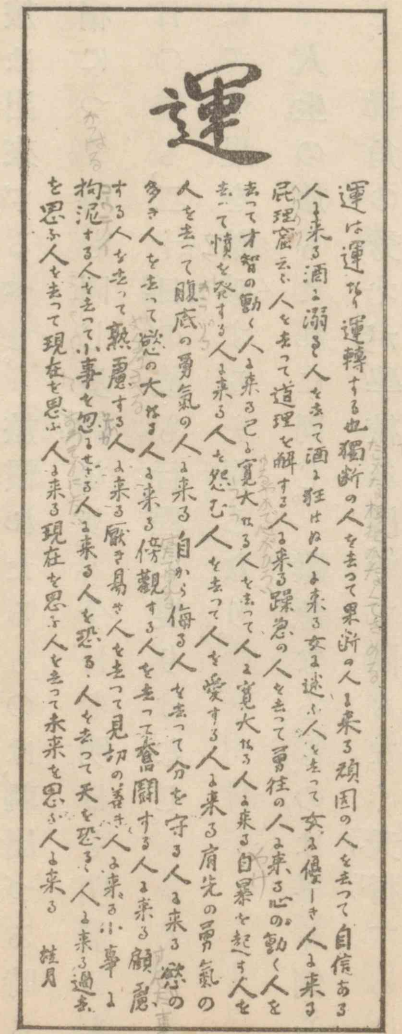
二 人の運

大町桂月

大町桂月

運は躁急の人を去つて、勇往の人に來る。「急がば廻れ瀨田の長橋。」と、古人は躁急の人を戒めたるにあらずや。「待てば甘露の日和。」とも戒めたるにあらずや。「急がずば濡れざらましを旅人の後より霽るゝ野路の村雨。」と、太田道灌も歌へるにあらずや。「人の一生は重荷を負うて遠き路を行くが如し。急ぐべからず。」と、家康も遺訓を垂れたるにあらずや。「羅馬は一日にして成りたるものにあらず。」といふ西諺も

賢き人　小早川隆景。



運

運は運なり運轉する也獨斷の人を去つて果斷の人に來る頑固の人を去つて自信ある人に來る酒に溺るゝ人を去つて酒に狂はぬ人に來る女に迷ふ人を去つて女に優しき人に來る屁理窟云ふ人を去つて道理を解する人に來る躁急の人を去つて勇往の人に來る心の動く人を去つて才智の動く人に來る己に寬大なる人を去つて人に寬大なる人に來る自暴を起す人を去つて憤を發する人に來る人を怨む人を去つて人を愛する人に來る肩先の勇氣の人を去つて腹底の勇氣の人に來る自から侮る人を去つて分を守る人に來る慾の多き人を去つて慾の大なる人に來る傍觀する人を去つて奮闘する人に來る顧慮する人を去つて熟慮する人に來る厭き易き人を去つて見切の善き人に來る小事に拘泥する人を去つて小事を忽せにせざる人に來る人を恐る人を去つて天を恐るゝ人に來る過去を思ふ人を去つて現在を思ふ人に來る現在を思ふ人を去つて未來を思ふ人に來る

桂月

大町桂月筆

あるにあらずや。「この手紙は急ぎの手紙なれば、ゆつくり書け。」といひし賢き人もあるにあらずや。旅行慣れざる人の歩きぶりを見るに、むやみに急ぐ。それも僅々五六里の路ならばそれにてよけれど、十里以上となれば忽ち倒るべし。何ぞ朝出づる時の威勢

東海道五十三次 江戸から東海道を通つて京都に上る道々の宿場五十三。

よくして、晩宿につく時のぐだ〳〵したるや。一二日の旅ならば、急いで行くことを得べけれども、一週間以上の旅は出來ざるべし。旅慣れたるものは、朝出づる時も晩宿につく時も同じ歩調なり。今日も明日も明後日も十日の後も、二十日の後も行程に變りはなし。かくて平氣にて千里を踏破するを得るなり。

人生の旅もこれに同じ。躁急なるものは早く倒るべし。折角の秀才が學校を出でて間もなく夭折するは、學校時代に急ぎ過ぎたるなり。東海道五十三次を走り通しに走れざるにもあらず。走れば歩く人よりは早く京都につくべし。その代りに途中の風景・事物は一向眼に

囊中の錐云々 「平原君曰ク、夫レ賢士ノ世ニ處スルヤ譬ヘバ錐ノ囊中ニ處ルガ如シ、其ノ末タチドコロニアラハル云々。」(史記、平原君傳)

入らざるなり。人の年齢によりて大別すれば、青年時代は走るものなり。壯年以後は歩くものなり。走るには走れど、平地を走るなり。歩くには歩けど、山坂を歩くなり。走るは早けれど、思慮分別は出來ず。歩くは遲けれど、思慮分別が出來るなり。書生が一躍して參議となりしは、明治の初の一夢なり。社會の秩序整ひたる今日にては、一歩々々階段を踏んで行かざるべからず。隨つて大いに達せんとせば、長命ならざるべからず。待てば長きやうなれど、囊中の錐豈穎脫せずして止まんや。人は少時より身を終ふるに至るまで、よく勉めよく遊ぶといふことが必要なり。いづれが主かといへば、無論勉むる

ことなり。勉めんが爲に遊ぶべし。遊ばんが爲に勉むべからず。いつも餘裕を存して、而も腹中には絶えず精力が充滿して居らざるべからず。精力充滿すれば、如何なる場合にも勇往す。急ぐは不可なれども、ぐづら〳〵して居りては豈好運を得べけんや。流るゝは水の性なり。動くは人の性なり。動いて進め。雨降らん、風吹かん、險山あらん、荒浪あらん、障害あらん、艱難あらん、攻撃あらん、非難あらん、貧苦あらん、病魔あらん、惡魔あらん。苦しきこと多けれども、それを排して進むに非ずんば、好運の樂土に達する能はざるなり。西諺に曰く、「怯者は不運を恐る、不運は勇者を避く。」と。

（桂月全集）

菊池寛 小説家。戯曲家。香川縣の人。明治二十二年生。
筒井順慶。
松永久秀。
荒木村重。
和田惟政。
別所長治。

三 形

菊池寛

菊池寛

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衞は、五畿内・中國に聞えた大豪の士であつた。

其の頃畿内を分領して居た筒井・松永・荒木・和田・別所など大名・小名の手の者で「鎗中村」を知らぬ者は恐らく一人も無かつただらう。それほど新兵衞は扱き出す三間柄の大身の鎗の鋒先で、魁・殿の功名を重ねて居た。その上彼の武者姿は戰場に於て、水

唐冠

際立つた華やかさを示して居た。火のやうな猩々緋の陣羽織を着て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりのけざやかさを持つて居た。「あゝ猩々緋よ、唐冠よ。」と、敵の雜兵は、新兵衛の鎗先を避けた。味方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに、敵勢を支へてゐる猩々緋の姿は、どれほど味方にとつて頼もしいものであつたか分らなかつた。又嵐のやうに敵陣に殺到する時は、その先登に輝いてゐる唐冠の兜は、敵にとつてどれほどの脅威であるか分らなかつた。

かうして「鎗中村」の猩々緋と唐冠の兜は戰場の華であり、味方にとつては信頼の的であつた。

「新兵衛どの、折り入つてお願がある。」

と元服してからまだ間のないらしい若い士は新兵衛の前に手を突いた。

「何事ぢや、そなたとわれらの間に、さやうな辭儀は入らぬぞ。望といふを早う言うて見い。」

と育むやうな慈顔を以て新兵衛は相手を見た。

その若い士は、新兵衛の主君松山新介の子であつた。そして幼少の頃から、新兵衛が守役として我が子のやうに慈み育てて來たのであつた。

「外の事でもおりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、

筒井順慶　織田・豐臣時代の大名。天正十二年(二二四四)歿、年三十六。

何ぞ華々しい手柄をして見たい。就いては、御身の猩猩緋と唐冠の兜を貸してたもらぬか。あの陣羽織と兜とを着て敵の眼を駭かして見たうござる。」

「はゝゝ念もない事ぢや。」

新兵衞は高らかに笑つた。新兵衞は相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受容れる事が出來た。

「が、申して置く。あの陣羽織や兜は、申さば中村新兵衞の形ぢやは。そなたがあの品々を身に着ける上からは、われらほどの肝魂を持たいでは叶はぬことぞ。」

といひながら、新兵衞はまた高らかに笑つた。

そのあくる日、攝津平野の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の兵と鎬を削つた。戰が始る前、何時ものやうに猩猩緋の武者が唐冠の兜を朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乘をしたかと思ふと、駒の頭を立直して、一氣に敵陣に乘入れた。

吹き分けられるやうに、敵陣の一角が亂れた所を、猩々緋の武者は鎗を附けたかと思ふと、早くも三四人の端武者を突き伏せて、又悠々と味方の陣へ引返した。

その日に限つて、黑皮縅の鎧を着て、南蠻鐵の兜を被つて居た中村新兵衞は、會心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者振を眺めて居た。そして自分の形だけですらこれ程の力を持つて居るといふことに、可な

り大きい誇を感じて居た。

彼は二番鎗は自分が合はさうと思つたので、乘出すと、一文字に敵陣に殺到した。猩々緋の武者の前には、戰はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衞の前には、びくともしなかつた。その上に、彼等は猩々緋の「鎗中村」に突きみだされた恨を、此の黑皮縅の武者の上に復讐せんとして猛り立つて居た。

新兵衞は何時もとは勝手が違つて居ることに氣が附いた。何時もは虎に向つて居る羊のやうな怖氣が敵に在つた。彼等が狼狽へ血迷ふ所を突き伏せるのに、何の造作もなかつた。今日は彼等は對等の戰をする時のやうに勇み立つて居た。どの雜兵も〳〵十二分の力を新兵衞に對して發揮した。二三人突き伏せることさへ容易でなかつた。敵の鎗の鋒先がともすれば身をかすつた。新兵衞は必死の力を振つた、何時もの二倍の力さへ振つた。が彼がともすれば突きまけさうになつた。手輕に兜や猩々緋を貸したことを後悔するやうな感じが頭の中を掠めた時であつた、敵の突きだした鎗が裏をかいて彼の脾腹を貫いて居た。

（菊池寛全集）

河井醉名　名は又平。詩人。堺市の人。明治七年生。

一三　明るい顔

河井醉茗

なんといふ明るい顔
その顔があらはれると
まはりが明るくなる。
クリーム色の薔薇一輪
新しく挿しかへたよりも
室の中があかるくなる。
その顔には
ひろびろとした野原のやうな輝きと

まともに向ふ力と
いつも咲いたばかりの花のやうな
香氣とがある。
くもりのない
陰翳（かげり）のない
たくみのない
僞のない
ありのままの心が
ありのままに表れて
夢も幻も見えない顔。

誰にでも呼びかける顔
凡てに背いてゐる顔。
その顔があらはれると
人達がいきいきと淨くなり
どんな世の中にも
賴みになる人が居るやうで
心が明るい方に反射し
誰の顔も明るくなる。

（紫羅欄花）

青木良吉
東京高等工業學校教授。

一四 色

青木良吉

「色とは何か。」と聞かれると、一寸答へにくいことであるが、通俗的に云ふなら色とは赤・青・黄・綠・黑などのことで、少しむつかしく云ふと、色とは物體から出る刺戟によつて、眼の網膜上に受ける一種の感覺に外ならないものである。

此の感覺は、刺戟の種類の異なるによつて違ひ、或は又感ずる人々の年齡とか、其の物體を照らす光線の種類とかによつても、幾分違ふものであるから、ほんたうに色の種類は其の名の如く色々であつて、到底數へつくすこと

は出來ないものである。

色が如何に吾々人間生活に必要であるかと云ふことは、次の様に考へただけでも、すぐ想ひ當ることである。

今吾々の周圍にある一切のものから、色と名のつく色を全部取除いたと假定したら、どうなるかを想像して見ると、實に悲慘な結果になることであらう。

艶麗眼を驚かすべき吳服屋の陳列品は白色になるし、萬綠叢中紅一點と咲いて居る花も區別がつきにくくなるであらう。綠の黑髮、愛らしい黑い目！すべては化して大理石像の如く白くなり、眼に觸るゝものすべて白色となつて、恰も雪の降つた大地の様に、太陽光線の反射

が多くなり、眩しい一面の銀世界となつて、遂には反射し來る紫外光線のために全世界の人類否動物は、すべて盲になるか、又は盲とならないまでも、丁度晝間見る猫の眼の様に瞳孔が非常に細くなつて、盲の様な白眼勝の變な形相になりはしないかと想像せられるのである。

色は斯様に人生に必要なものであるのに、吾々が少しもその有りがた味を感じないのは、何時何處でも勝手に無代償で得られるためであつて、丁度空氣や水が大切なものであるのに、何とも感じてゐないのと同じ理由である。

斯様に色といふものが、一時になくなつた極端な場合

を考へて見ることによつて、如何に色といふものが、人生に必要缺くべからざるものであるかを想像することが出來ると思ふが、然しそんな極端な場合でなくても、平常の場合に於て、吾々は周圍にある色から、二六時中種々雜多な影響を、肉體及び精神の上に受けてゐることは事實であつて、其の影響は非常に大きいものであるけれども、只其の刺戟が絕えず連續して來てゐるので、習慣となつた爲に、感じが薄くなつてゐるに過ぎないのである。

例へば讀書に疲れた場合には、一輪挿の花を見たり又は庭木の綠を眺めることによつて、疲勞が恢復するが如き、尙又神經質の人の居間は多くは色の調和がとれてゐないと云ふことなど、考へればいくらでも例示することが出來る。

斯樣に大自然は吾々に、種々の色や形などに於て、絕えざる刺戟を與へてくれるものであるが、此の刺戟を巧に利用するに於ては、心持に爽快を覺え、從つて身體は健康となつて、其の幸福は測り知るべからざるものがある。

此の意味に於て、家庭で子供の情操敎育上、衣服の色相、家具・什器の着色などにも大いに注意を拂ふことが必要である。

（アルス婦人講座）

湯淺常山　名は元禎。字は文祥。江戸時代の儒者。天明元年(二四四一)歿、年七十四。

一五　古名將の嗜

湯淺常山

太田持資は上杉の家老なり。鷹狩に出でて、雨に逢ひ、百姓の家に入りて、「蓑を貸し候へ。」と言ひしに、若き女、ものは何とも言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、「花をくれよといふ事にてはなし。」とて、腹立てて歸りしに、これを聞きし人の「それは

太田持資(佐藥筌里筆)

七重八重云々　後拾遺集、中務卿兼明親王の作。

七重八重花は咲けども山吹の
　みのひとつだになきぞ悲しき

と言へる古歌の心にて、蓑なしと申す事を、花もて知らせ申したるなり。」と申しければ、持資駭きて「我これ程の事だに知らで、百姓の娘に劣れる事口惜し。」とて、それより書を讀み、歌に志を寄せにけり。

或時、下總の國へ軍を出ししに、「山涯(やまぎは)の海邊に、山の上より石弓を張りたり。潮たゝへたらば通り難かるべし。いかゞ。」とありし時、をりふし夜半なるに、持資「いざ見て來(キタ)らん。」とて馬を乘出しけるが、そのまゝ歸り「潮は干たり。」とて、軍を押通しけり。これは

遠くなり云々　冷泉爲守の作。爲守は連歌の名家。曉月法師といふ。嘉暦三年（一九八八）歿。

そこひなき云々　古今集、素性法師の作。

遠くなり近くなるみのはま千鳥
なく音に潮のみちひをぞ知る

と詠める歌あり。それを思ひ出して、千鳥の聲遠く聞えたれば、潮の干たるを知りたりとなり。

また退口(のきぐち)に利根川を渡す時、これも夜半にて、暗さは暗し、いづこか渡瀬なるべきと口々に言ひけるに、持資

そこひなき淵やはさわぐ山川の
あさき瀬にこそあだ波は立て

と詠める歌あり。波の荒き所を渡せと下知して、難なく淺瀬を渡りけり。

かくの如く、昔より武將は必ず學問に心を寄せ、歌の道

宇治の關白　藤原頼通。道長の長子。承保元年（一七三四）歿、年八十三。

を知りけり。

奥州の合戰に八幡太郎義家、安倍貞任・宗任を攻めて、衣川の城に追ひ詰めし時「きたなくも後を見するかな。もの言はん。」とて、

衣のたては綻びにけり

と言ひかけしに、貞任しころを振向けて、

年を經し絲のみだれのくるしさに

と附けたりければ、義家つがひたる箭をさしはづしけりとぞ。かゝる烈しきをりにかく附けたる事、優に優しき事なるべし。

かくて義家上京の後、宇治の關白を訪うて軍物語しけ

中納言匡房　大江匡房。學者。天永二年(一七七一)歿、年七十一。

金澤　羽後國(秋田縣)仙北郡金澤町。

るを、中納言匡房聞きて「器量は賢けれども、軍の道は知らず。」とつぶやきけるを、義家の郎等聞きて「憎き事申され候。」と義家に申ししかば、義家「仔細あるべし。」とて、匡房の中納言、車に乘りける所へ參りて、やがて弟子になりて學問しけり。後三年の合戰に義家金澤の城を攻めし時、一行の雁の刈田の面におりんとしけるが、俄に驚き飛び亂れけるを、「兵法に『鳥の起るは伏なり。』といふ事あり。定めて伏兵あるべし。」とて、野の三方を取卷きしかば、案の如く三百餘の伏兵ゐたりしを攻め破りけり。義家學問に心を寄せずば、などかゝる事を知るべき。

右大將頼朝和歌に心を寄せ、近き年、信玄・謙信兩人とも

蒲生飛騨守　武將。文祿四年(二二五五)歿、年四十。

松崎　今三重縣(伊勢國)一志郡。天正年中蒲生氏の有となつた。

細川越中守　忠興。三齋と號した。

なき名ぞと云々　後撰集卷十一、よみ人知らず。

菊池寂阿　名は武時。吉野朝の忠臣。肥後國(熊本縣)の人。元弘三年(一九九三)歿、年四十二。

後醍醐天皇　第九十六代。

櫛田宮　櫛田神社。福岡市博多祇園町にある。

詩歌を好みけり。蒲生飛騨守氏郷は、伊勢の松崎十二萬石より、奥州會津百萬石を太閤より拜領し、奥州をきり鎭めたる無雙の猛將なりけれども、極めて和歌を好きけり。氏郷の家に佐佐木の鐙と言へる名高き鐙ありけるを、細川越中守所望しけるに、家來ども「これは名物にて候。別の似よりたる鐙進ぜられよ。」と申しければ、氏郷

なき名ぞと人にはいひてありぬべし
こゝろのとはばいかゞ答へん

と言へる歌の心の恥かしとて、かの鐙を贈りけりとなり。

元弘の亂に菊池寂阿入道が、後醍醐天皇の敕命にて敵の城に寄せける時、櫛田の宮の前にて馬のすくみたりし

梶原　梶原景高。

一の谷　攝津國（兵庫縣）武庫郡、神戸市の西にある。

に、

　　もの丶ふの上箭のかぶらひと筋に
　　　おもふこ丶ろは神ぞしるらん

と詠みて、神殿の大蛇を射て、馬のすくみ直り、既に討死すべき時、故郷へ一首の歌を書きつけて遣しけるに、

　　ふるさとにこよひばかりの命とも
　　　知らでや人のわれを待つらん

と詠みて、忠義の爲に命を捨てけり。これ等皆文武の人と申すべし。

　大將ばかりにもあらず、名高き士は皆書を讀み、學問し、和歌をも好きけり。梶原が一の谷にて、

梶原　梶原景季。

　　もの丶ふのとりつたへたるあづさ弓
　　　ひきては人のかへすものかは

と詠み、頼朝の奥州を攻めし時、白河の關を越ゆるに、梶原

　　秋風に草葉のつゆをはらはせて
　　　きみがこゆれば關守もなし

と詠みけりとかや。すべて學問して名高き勇士多し。文武は二つならず。詩歌を公家の玩物と思へるは、無下に口惜しき事なり。

（常山紀談）

若山牧水
名は繁。歌人。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十四。

一六 春夏秋冬

若山牧水

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山櫻花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

岩かげに立ちてわが釣る淵のうへに櫻ひまなく散りてをるなり

峯かけてきほひ茂れる杉山のふもとの原の山ざくら花

若山喜志子
歌人。若山牧水の妻。

若山喜志子

かはゆさになみだながれぬ耳かしげ子はいつしんに蟬を聞き居り

朝すずの梅の木かげに盥よせ物あらひをれば落つる青梅

大根をばたのしみ干しつそれも終へぬ今日は家居をいかになすべき

老いはてしちちのましまます信濃路よはるかに見ゆる雪のむら山

與謝野晶子
歌人。堺市の人。明治十一年生。

與謝野晶子

はてもなく菜の花つづく宵月夜母のうまれしくに美しき

なつの風やまよりきたり三百の牧の若馬耳吹かれけり

金色の小さき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に

みぎは來る牛かひ男うたあれな秋のみづうみあまりさびしき

一六 春夏秋冬

木下利玄
歌人。岡山縣の人。大正十四年歿、年四十。

木下利玄

雨傘をひらけば音あり冬めきし時雨の中に朝戸出するも

日の出頃街道の霜まつしろにからからからつづく百姓の車

軍艦の八幡ゆるがぬ胴なかをさざなみうてり灣のしづけさ

島崎藤村 名は春樹。詩人。小說家。長野縣の人。明治五年生。

一七 文章の道

島崎藤村

一

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗の無かつた私も、やうやく岸を離れることができるやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通うたうちに、向ふの河岸まで泳ぎこすことができた。更にまた一夏泳いでみたら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃にはよく解らなかつた水瀬の速い遲いも解つてきたし、眞水と潮流の混り合つた

あの川の中の冷たい溫かいも解つてきたし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることもできた。板子無しには溺れるほかは無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。普通の泳ぎ手がゆけるところまでは自分も到り得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身のできる人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。

文章の道にも、たれにでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして「根氣」さへあれば、そこまでゆ

小諸　信越線の一驛。長野縣小諸町。

慢—漫

くことは決して難く無いに相違ない。

二

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。だれでも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。たゞ當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んでいく。射手の心にも賴むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は、高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が私

たちの矢場へ來た。その老人が、先づ姿勢を正すことを私たちに敎へてくれた。それからの私たちの矢は、たとひ的を貫くことができないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所をいくやうになつた。

これは文章の道にも當て箝めてみることができる。たゞ好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

三

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬をかついでいつて土を耕してみた。私は、先づ荒れた畠の地面を掘り起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や、じやがいもの芽のやうな植ゑ易いものから作つてみた。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑてみた。草を取りにゆき、肥料をかけにいつた。じやがいもの花が白くさかりな頃にいつて、試みに土の中を探つてみると、はや圓いのが幾つも〳〵根もとの方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には、なつた嫩い實を摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、ほんたうの農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でも能く思ひ出すことができる。

われ〳〵が文章の手本とすべきものが、何程われ〳〵の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みな

淺草橋　隅田川にそゝぐ神田川の下流に架した橋。

兩國橋　隅田川に架した、日本橋區から本所區へ通じる橋。

ければならない。「試みる」といふことは「悟る」といふことの初である。

四

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕ぎ廻つたことがある。最初のうちは、むやみに手足を動かし、あの長さ一丈ほどもある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つてみた。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押すことができるやうになつた。向ふから大きな傳馬が

やつてきたぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いでゆく樂しみなどもそれから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには「力の省略」がある。「簡素の美」がある。

文章の道にも、むやみに筆を弄することが決して自己の眞の表白とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶の力」がある。

（飯倉だより）

佐佐木信綱　文學博士。歌人。三重縣の人。明治五年生。

本居宣長　國學四大人の一。鈴の屋と號す。伊勢松阪の人。享和元年(二四六一)歿、年七十二。

寶永二年　東山天皇の御代。將軍綱吉の時(二三六五)。

享保十三年　中御門天皇の御代。將軍吉宗の時(二三八八)。

元文五年　櫻町天皇の御代。將軍吉宗の時(二四〇〇)。

明和五年　後櫻町天皇の御代。將軍家治の時(二四二八)。

大傳馬町　今の東京市日本橋區にある。

一八　本居宣長の母

佐佐木信綱

本居宣長の母勝子は、寶永二年四月十四日、伊勢松阪新町の村田孫兵衞豐商の四女として生まれ、享保十三年二十四歳で小津三四右衞門定利の妻となつて、二男二女を生んだ。其の長男が宣長である。元文五年三十六歳の時に夫に後れ、明和五年正月朔日、六十四歳で世を去つた。

小津家は松阪の舊家で、江戸に出て、木綿問屋を營んでゐた。宣長の曾祖父・祖父相繼いで、商業が大いに榮え、父三四右衞門これをうけついで熱心に業務に從つたが、手代の爲に誤られて資產を失ひ、四十六歳の七月江戸大傳

馬町の店で歿した。三四右衞門の死は、言ふまでもなく小津家卽ち本居家にとつて大災厄であつた。養嗣子定治は江戸にあつたが、それもまた數年の後世を去つた。遺產として殘つたものは四百兩ばかりあるだけであつたが、それも親戚に保管され、其の利子として僅かの金が給されるだけであつた。この間に立つて一家の生計を維持すると共に、宣長を始め子女の教育を全うしなければならなかつた。尋常の婦人ならば、殆どせんすべをも知らないで、茫然自失すべき窮境であつたのである。所が勝子は、この間に處して少しも狼狽せず、十分な思慮と明敏な判斷とを以て雄々しくも一家の經營に當つた。

こゝに特筆すべきは、勝子がその子宣長に對する明察と事宜を得た其の教育の態度とである。實に勝子の賢明は、よく本居一家の危急を救ひ得たばかりでなく、更にまた本居宣長といふ一大學者を生ぜしめて、日本の國家及び學界に未曾有の寄與をなさしめたのである。賢母の功績亦大なりといふべきである。

何をか勝子の明察といふ。曰く、彼が宣長の到底商人たるべきものでないといふことを見ぬいて、彼をして學者たらしめ、以てその天分を全うせしめようとし、しかも純然たる學者の生活の困難なるを見て、生活の資を得べく醫師たらしめようとしたことである。よくその子を

寶暦二年　桃園天皇の御代。將軍家重の時(二四一二)。

堀景山　儒者。安藝侯に仕へ專ら京都に住す。寶暦七年(二四一七)歿、年六十九。

見拔いたと共に、また生計の點にも十分に心を用ひた勝子の先見と思慮を盡くした態度とは、眞に常人の及び難いことではないか。己にこの方針を立てた。卽ち寶暦二年、宣長が二十三歳の春、京師へ留學にやることにした。

宣長の舊宅

宣長は京都に上つて、まづ堀景山に儒學を學び、後武林幸順に醫を學び、五年四箇月間留つた。この五年餘の留學が、やがて宣長が學問の上にも、また生活の爲にも基礎となつて、宣長をして後年の宣長たらしめたことは、宣長の傳に於ける明白な事實で

ある。宣長をしてこの五年間餘、何等後顧の憂ひなく、又都會生活のあまたの誘惑にも陷らずに、十分勉學するを得しめたのは、まつたく勝子の苦心と激勵との結果であつた。此の間困苦の中から、宣長を留學に出して、一家の經濟を處理し、又學費をおくる勝子の苦心は決して一通りでなかつた。彼は或は家財を賣り、或は親戚から借錢をなし、苦心慘澹して之を處理した。しかも彼の女は其の子に對して、例へば會ひたい情をも抑へて歸鄕を延させようとしたやうに、もとより節約を要求こそはしたれ、必要の費用に對しては常に事を缺かさせず、決して愚痴がましいことを言はなかつた。しかし、自分の苦心は或

程度まで打明けて之を誡めた。さうして、宣長が日常生活につき、又勉學については絶えず啓發し、又宣長の雙肩に懸つてゐる家運挽回の大責任についてこれを激勵することを忘れなかつた。勝子が宣長に與へた書翰の一つに、

「扨々何かと心づけ候へども、入用多く苦勞致し申し候。隨分々々無事にて心づよく思ひ、外の義に心移し申さずたゞ一筋に醫者の方心がけ、申すまでは無く候へども、人間心一筋を強く、道々を專一になさるべく候。此の所そもじ取りそこなひ取りはづし申され候と、いつもいつも申す通り、一人の母此の世より迷ひ申し候。

其の上、父母先祖の跡の所よく〳〵心にしめ、專一に守り申さるべく候。
此の所取りそこなひ候へば、親の恥申す樣はなく、大不孝と存じ候。

とあるが如きは、最も敬重すべき文字である。

而して、勝子が當時のやうな賢慮と苦心と激勵と誠意とは、もとより俊秀の子である宣長に感應せずにはゐなかつたに相違ない。當時勝子から贈つた書翰は、前に述べた如く數十通も殘つてゐるが、宣長から答へたものは遺憾ながら殆ど傳はつてをらぬ。隨つて勝子の心づくしが如何に宣長の心に反應したかはこれを知り得ない

が、しかし、其の反應の效果を明瞭に吾人に語る大なる事實がある。それは、宣長の學者としての成功である。宣長をしてかやうな國學上の偉人とならせた素因は、多くこれを母堂勝子の人格に求めるべきである。宣長の學問と事業とを嘆美するにつけても、吾人は必ず勝子の賢明を忘れてはならぬ。我が國に、凡ての方面に渉つて最も必要とするところは大人物である。さうして大人物を生ぜさせるには國民の母が賢明であらねばならぬ。吾人は今に於てわが勝子刀自を偲ぶ情が、殊に切ならざるを得ない。

（賀茂眞淵と本居宣長）

芳賀矢一　文學博士。國文學者。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

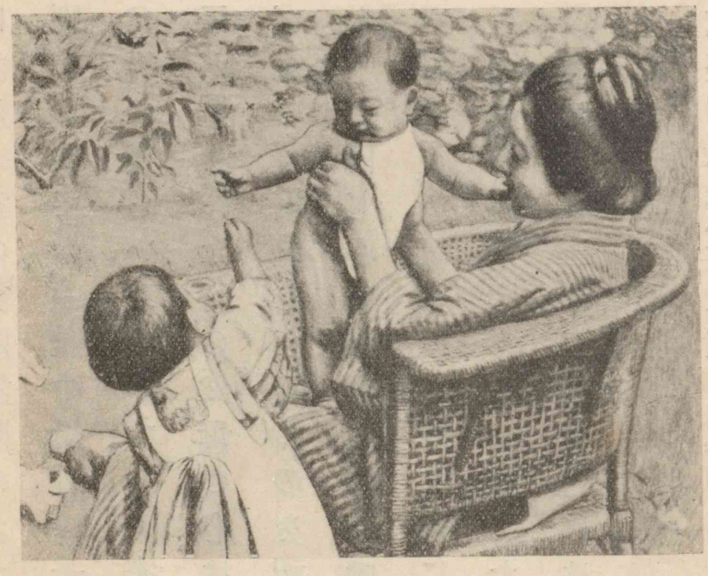
すなほ

一九　我が國の家庭

芳賀矢一

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて路端に遊んでゐるのは、我が國ではどこへ行つても見受ける事であるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が「何といふかはいらしい様子であらう。こゝに日本の美しい國風が見える。」と言つて、感心したさうである。すなほに親の言ひ付けを守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹をかはいがつて世話するのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切にするのも、日本の家庭の特色

くはし



撫子（白瀧幾之助筆）

である。この西洋人は、くはしくは我が國の家庭の内部を知らなかつたのであらうが、路端の子供を見て、我が國の家庭の美德「父母ニ孝」「兄弟ニ友」の一端を認め得たのである。父母の子を愛する情は東西共に變りはないが、日本の家庭では殊に子供を大切

にする。家の貧富・貴賤によつて、生活の上には夫々の差別があつても、一體の風習は子供を大切にする。子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生まれた時の父母の心は、家の後繼が出來たのを喜び、家の益々繁昌して行くのを祝ふのである。親族も、朋友もみな同じ心で祝賀するのである。七夜までの中に名を附ける。「行末は立派な人になつて御國の爲にもなれ。」と、祖先の名に因んだり、めでたい語などを選んだりして命名する。三十二・三日目には産土神にお宮參をして、誕生したことをお知らせする。三つ、五つ、七つとだん／＼成長すれば、七五三の祝といつて、その年々の十一月に參

詣する風習もある。男の子の袴着の祝、女の子の帶の祝、父母は只管その子の成長を樂しむのである。三月三日の雛祭は女の子の節供、五月五日の端午は男の子の節供、一家中の歡喜は子供等の爲に傾けられる。美しい雛人形、勇ましい。鯉幟、かういふ樂しい日は年々に繰り返されるのである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供等を喜ばせようと苦心し、親類・知友からも、お子樣へと心をこめた品物を贈る。我が國の都市程、おもちや屋の多い所はないといふのも、小さい國民をかはいがる國風の盛んなことを證明するのである。我が國の家庭には、お父さんも、お母さんも、お祖父さんも、お祖母さんもいらつしやる。

日本の子供は父母の慈愛の外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は孫をいつくしんで老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌が祀つてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んで居つて、だん／＼と子孫に傳はつて行くのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さういふもののないところもあるが、本家にさかのぼり、源を正せば、皆それがある。家には家の紋もある。

　　父母は我が家の神我が神と
　　心盡くしていつけ人の子

と、本居宣長大人は歌はれた。父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神と崇めるのが、我が國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しい懷かしい親愛の情に、貴い有難い敬愛の情が湧いて、父母に對しては神に對する樣な虔しやかな心持になるのである。それ故、言語・動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では、親子・夫婦・兄弟・姉妹の間の言葉遣ひはすべて對等であるが、「家の神」と仕へ奉る父母に對しての言語は、固より別でなければならぬ。先祖と同居して居る我が國の家庭では、目上に對する言語と目下に對する言語に明らかな差別がある。親代りに世話をし、いたはつて下さる

兄姉に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄姉はあくまで幼少な弟妹を憐み、弟妹はどこまでも兄姉を目上の人と崇め、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、此に美しい家庭が成り立つのである。「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ」の家庭が存立するのである。西洋人は「日本は子供の樂園である。」と、言つて居る。「日本は子供をかはいがる國である。」と、西洋の讀本にも書いてある。我等が、この國に生まれたのは、我等の幸である。

（改訂女子新國文）

落合直文　國文學者。仙臺の人。明治三十六年歿、年四十三。

二〇　この正月

落合直文

落合直文

年もはや暮れんとす。病院の寢臺にうち臥して、つくづくと過去の正月を追想するに、大かた皆忘れにたれど、幼時の事どものみは、よく記憶せり。幼時は思想單純なり。一故に一たび頭腦に刻みたることは、生涯忘るゝこと能はざるにやあらん。

或年の正月、父君より賜りたる紙鳶は、牛若丸と辨慶との繪なりしよ。

或正月、母君の得させ給ひし雙六は、振出

躑躅岡─仙臺市の東部にある丘。今は公園になつてゐる。

しが曾我兄弟にて、上りが神功皇后と武内宿禰との繪なりしよ。この紙鳶この雙六は、最もわが氣に入りしものと見えて、牛若丸・辨慶の面影はさらなり、雙六の繪も大かた記憶せり。その紙鳶を揚げたる日は風強かりしが、隣の栗の木に引きかけしこと、又その雙六にて取りえたる菓子は如何なる菓子なりしか、その數は幾つなりしか、一一記憶するもをかしや。

七歳の頃と覺えたり。書きぞめに「南山壽」といふ三字を書きて、父君より「上和下睦」といふうるはしき墨を賜りたることあり。その日、父君の御ゆるしを得て、兄君とともに躑躅岡なる天滿宮に參詣せしが、その折のわが刀・脇

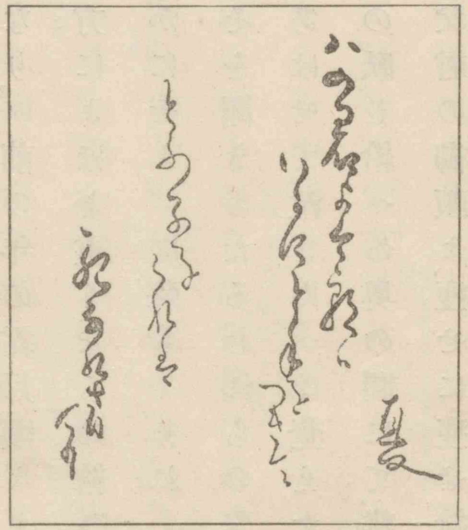
差よ、ふちがしらは唐獅子と牡丹とを彫刻せるもの、鐔はつやめきたる黒き地金に、七曜の星をちりばめたるもの、下緒は紫色にて平打なりしことまで記憶せり。その折、母君の着せ給ひし着物の紋も記憶すれば、袴の色も記憶せり。伴せしは、小姓の鐵之助・忠兵衛の二人と、仲間の彌助となり。石のきざはしを登る折は彌助に負はれ、繪馬堂を巡る折は忠兵衛に手を引かれたることも記憶せり。家に歸りて、着物は着替へたれど、刀・脇差は放たず、その日一日差し居りしことも記憶せり。その頃のわれらの心の如何に無邪氣なりしよ。思ひ出づる毎に、今一度さる幼時に立返らまほしう覺ゆるや。

わが幼時は殊に愉快なりしなり。思ひ出づることは悉く愉快なりしことにて、苦痛といふほどの苦痛は更に記憶せざるなり。その當時、わが家の勢は如何にといふに、極めて零落せる時なり。伊達家の門閥にて、きらびやかなる生活をなし居りたるものが、維新の激變に會ひ、家祿は召上げられ、家格は落され、何もたよるところなきに、家は大きなり、家來は多し、このほどのわが家の慘狀、父君・母君の苦心、あとにて聞き知りぬ。さる家運衰退の折なるに拘らず、苦痛といふほどの苦痛は覺えず、かく愉快なる事のみ記憶し居るは、父君・母君の溫かき情ならずして抑、何ぞや。

殊にわれらの最もよく記憶して忘るゝこと能はざるは、このほどのある正月、父君の病床におはせし時のことなり。前の年の霜月頃より病みつき給ひて、師走の末つ方によほど重くならせ給びたれば、母君は「松飾もおろそかにせよ。屠蘇もやめね。餅も少く搗け。」など宣へり。そを聞きゐたるわれらの失望は如何に。兄弟互に顏見あはせて、泣きぬべく覺えたり。さはいへ、元日には、父君の臥し給へる奥の間にて、雜煮など祝ひたるが、その折の父君の御顏よ、瘦せに瘦せ給ひて、髭なども恐しきまで伸びさせ給へり。母君に扶けられて、強ひて起きあがらせ給ひて箸を執りは執られしが、一口も召し給はで、そのま

父君よ今朝はいかにと手をつきてとふ子を見れば死なれざりけり。

ままた枕に就かせ給へり。その日、廊下にてわれは兄君と獨樂を廻しゐたるに、母君出で來給ひて「父君の御病氣なるに、心なきわざや。」と止めさせ給ひぬ。やがて、下の座敷にて姉君と羽子つきゐたるに、母君また出で來給ひて、そも止めさせ給ひぬ。夜に入りて、雙六・歌留多などのこと頻りに思ひ出でたれど、母君の許させ給はねば、取出さず。二日の朝、父君はわれらを呼び給へり。何事ぞと行き見れば、



落合直文の筆蹟

「わが病氣ははや快くなれり。今日よりは獨樂も廻せ、羽子もつけ、雙六もせよ、歌留多も取れ。かけ物はわれ取らせん。」とて、蜜柑あまた取出させ給へり。その折のわれらの愉快は如何に。過去の正月にこの時ほどの愉快はなかりしのみならず、未來の正月にも亦この時ほどの愉快はなからん。われは十五歲の折東京に出でたるが、その後の正月にて、この時ほどに愉快を覺えしといふ記憶を伴なふもの一度だになし。

人はそのいとけなき時に、十分なる慈愛に育てられなば、その生涯を通じて、その情を肝に銘じて忘るゝことなかるべきなり。われも子を持てり。身貴き人のことは

小田原　神奈川縣足柄下郡の海濱にある町。
逗子　神奈川縣鎌倉郡の海濱にある町。
修善寺　靜岡縣田方郡の山中にある溫泉町。
興津　靜岡縣庵原郡の海濱にある町。

知らず、家富める人のことは知らず、我等には我等の分あり。平生はとにかく、せめて正月ばかりも、彼等に愉快を與へんと思へり。かくてこの四五年は、病氣のため暖かき地に移りて正月を迎へたるが、いつも彼等を伴なひたり。一昨々年は小田原に、一昨年は逗子に、昨年は修善寺に、本年は興津に伴なひて、正月を迎へさせたり。雙六もすれば、歌留多も取れり。紙鳶も揚げたれば、羽子もつきたり。わが幼時の正月のことより考ふれば、彼等もその間にありて一二の記憶するものあらん。過去の正月は、彼等に對し、われはわが心に遺憾を覺えず。たゞこの正月よ、如何にして彼等に愉快を與ふべきか。今宵あたり、

彼等の母は、わが母君の宣ひしが如く「父君、病院におはすれば、松飾もおろそかにせん、屠蘇もやめん、餅も少く搗かん。」などいひ居るならん。彼等はそを聞きて、わが失望せし時の如く、必ずや失望し居るならん。わが父君は、よく我等の失望を愉快の地に替へさせ給へり。われは如何にしてか彼等の失望を慰むべき。思へば、この正月は、わが心一つにて、彼等が生涯忘るゝこと能はざる苦痛のものともなれば、又愉快のものともならん。はや餘日もなし。あはれ如何にせん。

（落合直文集）

松平定信　田安宗武の第七子。磐城國（福島縣）白河の城主松平定邦の嗣となる。幕府の老中。樂翁といふ。文政十二年(二四八九)歿、年七十二。

二一　祖先の祭祀

松平定信

人は父母に本づき、萬物は天地に本づきて生ずるものなり。先祖無くば、いかでか父母有らん。父母無くば、又いかでか此の身有らんや。さて、其の生ける時には事へて誠を盡くしあへざるが故に、祭祀の禮あり。

松平定信

祭祀の禮は人道の本なり。こゝに於て誠を盡くさざる時は、人道闕く。譬へば、父母・先祖は木の根・幹の如し。もろ〳〵の枝葉花實は伯叔父・姑・兄弟・從兄弟、其の外の諸親類・子孫の如きものなり。其の木の根に培ひ、水そゝぎて、根本堅ければ、大風にも倒れず、炎暑にも枯れずして、枝葉花實時に從ひ茂り榮ゆるなり。

若し其の根のくつろぎ搖ぐにも、培はず、水そゝがずして捨て置くのみならず、あまつさへ其のほとりの土を掘りのけ、根をおし動かす時は、或は大風に吹き倒され、或は炎暑に枯るゝは必然の事なり。枝葉ばかり大切にして、それに水そゝぎたりとも、其の根本枯れたるうへは、枝葉のみ榮ゆべき理無からん。人の父母・先祖に疎なるは、みづから木の根を搖がして倒すに異ならず。其の根枯る

みづから

榮え。

れば、かず〳〵の枝葉も從ひて枯るゝは、皆人の知る所なり。されば、父母・先祖に厚くして、子孫の繁榮を祈るべきことなり。

さるに、父母・先祖に疎にして、頼むべき筋も無き佛神に媚びへつらひて、子孫の榮えんことを願ふは、道理無き事なり。こを譬へていはば、松の木の茂り榮えんことを求むとて、梅の木に培ひ、水そゝぐが如し。松の榮えんことを求めば、其の根に培ひ、水そゝぐに若かざらん。梅の榮えんことを願はば、其の根を養ふに若くこと無からん。これ實理にして、しるしあることなり。

但し、父母・先祖に厚くするは、全く子孫の繁榮を願ふのみにはあらず。本に報ずる微意なり。先祖の神靈に事うまつるを計るに幾何も無し。幼にしては未だ事ふる道を盡くさず、稍成長しては力を盡くすことを知ると雖も、或は公務に暇無く、或は文武の學、又は親戚の交、他人の應對、職業の務等によりて、父母の膝下に在りて事ふることを得ざる日多し。たとひ生涯父母の膝下を離れずして事へたりとも、限りなき恩をば報い盡くすべきに非ず。父母既に身まかりて後は、悔いの八千度も甲斐なし。故に、歿後には其の神靈に事へて、在すが如く誠を盡くすは、已むことを得ざる至情を盡くすのみなり。子孫たるもの先祖に厚くば、先祖の神靈悅ばざらんや。さあらば、

驗—儉—險

祈らずとても子孫の繁榮疑ふべからず。父母存生の中に子孫を守らざる神靈有らんや。

然るに、愚かなるものは父母祖先の神靈を粗末にして、願ふべき筋も無き神佛にても、靈驗あらたかなりといへば、此處の神に、彼處の佛に、多くの金銀を擲ち、我が身及び子孫の福を願ふは惑へるなりけり。其の金銀を以て民を救ひ、善事に用ふるは、祈らざる祈にして、自ら其の身及び子孫にも福有るべきことは必然の道理なり。「神は非禮を享けず。」といふに、非禮の祈禱に多くの金銀をつひやすは、惜しむべきことならずや。

（燈前漫筆）

長塚節　小説家。歌人。茨城縣の人。大正四年歿、年三十七。

どうか

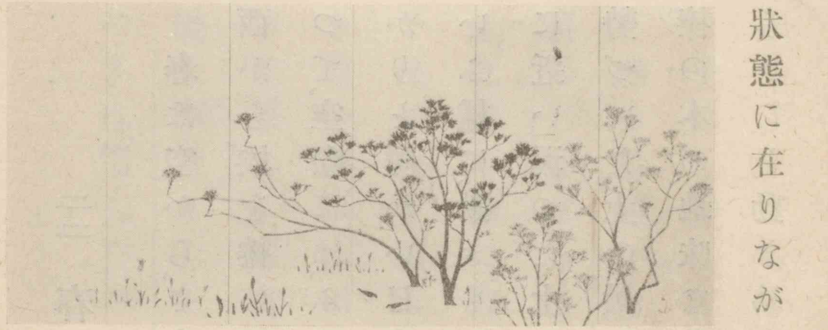
吸うて

三　春うごく

長塚節

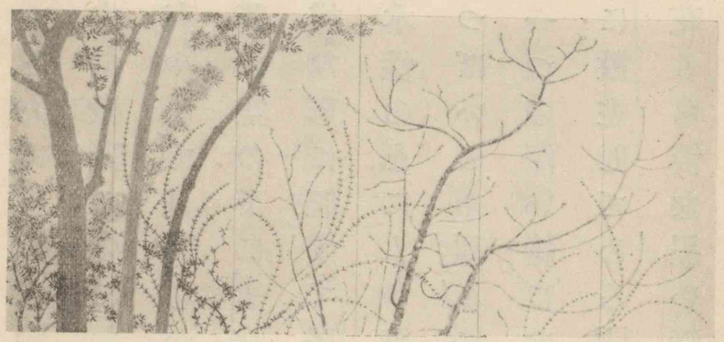
春は空から、さうして土から微かに動く。毎日の樣に西から埃を捲いて來る疾風が、どうかするとはたとまつて、空際には、ふは〳〵とした綿のやうな白い雲が、ぽつかりと暖かい日光を浴びようとして僅かに立騰つたといふ樣に、動きもしないで凝然として居る事がある。水に近い濕つた土が暖かい日光を思ふ一杯に吸うて、其の勢づいた土の微かな刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木の地味な蕾は、目に立たぬ間に少しづつ伸びて、ひらひらと動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の

粉―紛―扮



萌芽

狀態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでも、くゝくくと鳴き出す事がある。空から射す日の光はそろ〱と熱度を增して、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。土はすべてをだん〱と刺戟して、堀の邊には蘆やとだしばや其の他の草が空と相映じて、すつきりと其の首を擡げる。軟らかさに滿たされた空氣を更に鈍くする樣に、榛の木の花はひら〱と止まず動きながら、煤の樣な花粉を撒き散ら



小林柯白筆

してゐる。蛙は假死の狀態から離れて、軟らかな草の上に手を突いては、驚いた樣な樣子をして空を仰いで見る。さうして、彼等は慌(あわ)てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで、遠く聞く時は、彼等の騷がしい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は、更に、春の到つたことを一切の生物に向つて知らす。草や木が心づいて其の活力

を存分に發揮するのを見ないうちは、鳴くことを止めまいと力める。　田圃の榛の木はとうに花を捨てて、自分が先に嫩葉(わかば)の姿になつて見せる。　黄色味を含んだ嫩葉が、爽(サワ)やかで且朗らかな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下に、まだ猶豫(たゆた)うて居る周圍の林を見る。　岬の様な形に偃(は)うて居る水田を抱へて、周圍の林は、漸く其の本性のまに〳〵勝手に白つぽいのや、赤つぽいのや、黄色つぽいのや種々(いろ〳〵)に茂つて、それが氣が付いた時に急いで一つの深い綠になるのである。　雜木林の其處ら此處らに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆(そらまめ)の花も、可憐な黑い瞳を聚めて羞かしさうに葉の間からこ

さうすると

つそりと四方を覗く。　雜木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。　其の麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて春が闌けたと喚びかける。　さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配してゐるべき筈だと思つてゐる蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛び越え〳〵鳴き立てるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。　さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、これを仰げば眩しさに堪へぬやうに、其の身を遙かに煌めく日の光の中に沒して、其の小さな喉のちぎれる迄は劇しく鳴らさうとするのである。
蛙はいよ〳〵益〻鳴き矜(ほこ)つて、樫の木のやうな大きな常磐

磁—滋

木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。
　此の時、すべての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に附いて居たすべての雜草が爪立ちして、只空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれを凝然とひき留めて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と並行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して各自に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて、身をゆるがしながら殊更に鳴きたてる。白い絓絲（すがいと）のやうな雨は、水が田に滿つるまでは注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生まれて來た蛙は、刈株を引返し〳〵働いて居る人々の周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせ〳〵と促して止まぬ。蛙がぴたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと橫になる。さうして蛙は、ひつそりと靜かな夜になると、如何にも自分の聲が遠くかつ遙かに響くかを矜るものの如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く隔たつて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠りに誘ふのである。熟睡する事によつて、百姓は皆短い時間に疲勞を恢復する。

彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に逼る蛙の聲に、其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を喚び返すのである。　草木は、遠く遙かに響けと鳴く其の聲に撼(ゆす)られつゝ、夜の間に成長する。　櫟や楢や其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうして、それが鳴き止む季節までは、幾らでも繁茂することを繼續しようとする。　其處には、毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しと／＼と屢、梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い綠が地上を掩うて、爽やかな涼しい陰を作るのである。

(十一)

吉江喬松(たかまつ)　嘗て孤雁と號した。文學博士。詩人。早稻田大學教授。長野縣の人。明治十三年生。

丸の内　東京市麹町區、東京驛前一帶の土地。

二三　自然の力

吉江喬松

雨の細く降りそゝいでゐる日、丸の内の濠に沿うて歩いて行つた。　立並ぶ柳は既に薄綠して、其の下を人は傘を肩にして歩いて行き、電車は輕げに走り過ぎる。　何處ともなく春のけはひが現れてゐる。

ふと氣が付いて見ると、電車の敷石を緣に沿うて、若草の二葉が芽をふいてゐる。　其の芽の綠が、如何にも鮮やかで元氣が籠つてゐる。　若し雨が降り風が吹いて、電車の通行が十日も止つたなら、其の草の芽は長く伸びて、敷石の上を覆ひ隱さう。　其の割目からは根を張つて、石をば碎き果てもしよう。

怖しい力が二葉の中に包まれて

ゐる。

實に「春」ではないか。今まで此の空の一隅に蹲つて居た雲の群は、日の光に強く照らされて騷ぎ出し、ちぎれちぎれに亂れて都の空を覆ひ、帆檣のやうに群り立つてゐる煙突の上を、鳶は輪を描いて舞つてゐる。風が吹くと輕塵が揚る。見たまへ、此の時、都の中到る處、少しの空地でもあれば春草が一面に生ひ出て、日毎人の踏まないことのない電車路の緣にさへ、土を破つて草の若芽は萌え出づるではないか。

人生敗滅の姿は「春」に於て窺はれる。人は誇りかに勝者の冠を戴かうとしてゐる其の都會に、自然は尙も怖る

古城は春にして云云
「國破レテ山河在リ、城春ニシテ草木深シ。」（杜　甫）

煉瓦を敷きつめた銀座の街頭
○今は鋪裝道路になつてをる。

べき力を示して人を嘲つてゐる。古城は春にして草木が深い。けれども草の深いのは獨り古城のみではない。今若し、命じて一箇月の間車馬の通行を禁じ、人の往來を止め、各家戶を鎖して郊外に立退いてゐたならば、其の結果は如何であらう。恐らく煉瓦を敷きつめた銀座の街頭も、忽ち青草の原と化しはしまいか。怖しい自然の力よ、――勝者と自信してゐる人類も、やがては此の力に壓倒される運命を持つてゐるのではなからうか。

私は、自分で胸に描いた自然力の强さを目前に見るやうな氣がして、樣々な空想に耽りながら、濠端に沿うて步いて行つた。

（若き自然）

横山桐郎　農學博士。農林省蠶業試驗場技師。東京市の人。昭和七年歿、年三十九。

サギゴケ

忠臣藏　假名手本忠臣藏。竹田出雲・三好松洛・並木千柳等の合作で忠臣藏劇の代表的名作である。

二四　蟲の世界

横山桐郎

寒い風が温かくなり、日光がだん〳〵強さを増すと、自然は春の野外劇の準備に忙しくなる。

春空に囀る雲雀の歌と、日向の草土手に氣兼ねらしく咲くサギゴケなどの花にすがりついてゐる小虻の合唱に、野外劇の幕は引かれる。

それは年々同じ藝題を繰り返すのだが、昔から今日まで忠臣藏が少しも廢らないやうに、幾度繰り返されても、少しも興味が減ることなく、いつも湧くやうな人氣である。

無論、その規模・演出の技巧、將又綿密さに於て、自然の野外劇は人間のそれとは比較にならぬ程優れてゐる。

何時何處から生まれ出たかと思はれる白地に黒い紋付の翅を持つた中形の蝶々が、さも樂しげにひら〳〵と、或は大根の花を求め、或は蜜を求め、或は鬼ごつこをして花の間を飛び廻つてゐる。野外劇の序幕はこの白蝶の舞踊に始ると言つてよからう。

しかし、白蝶は蝶の中でも最も平凡のもので、その幼蟲の青蟲は、吾々の栽培する十字科植物の油菜・大根等の葉を食ふ害蟲であるが、春のおとづれを告げる第一の使者として、私はこの蝶に敬意を拂ふものである。

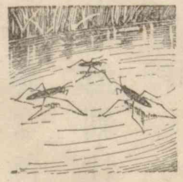
冬の間は全く休業してゐた畔の小溝が、春の讃歌の合唱を始めると、それにつれて蟲界の名ダンサー水スマシは眞先に得意のダンスを舞ひ始める。

すい〳〵と進み行く流の上、葦や杭の立並んだ間に妙技を振つて、散歩の人の眼をひき止める。小豆大の黑光りのする身體の背には、陽が白く銀の豆のやうに光つて見える。

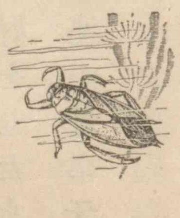
彼等は流に逆ひながら、さも身輕に水の面をくる〳〵と渦を巻いて走る。そして人の足音や、一寸物音がすると、眼にも留らぬ速さで廻り始め、更にひどく驚くと、ダンスをやめてあわてて水の中に潜つて行く。

そして水底の木片や小石の下に潜り込んで、暫くじつと様子をうかゞひ、もう大丈夫と思ふと、又ついと水面に出てダンスを續ける。その敏捷な妙技は蟲界第一である。水面を走ることでは、アメンボウも一廉のチャンピオンには相違ないが、その技は水スマシに比べてはお話にならない。

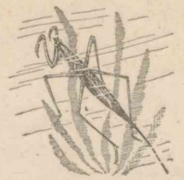
蛙を食べてゐるゲンゴロウ



アメンボウ

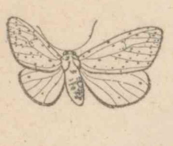


タガメ


水カマキリ

尙、水の中には、へうきんな體つきをしたゲンゴラウ、山賊のやうな面構に大鎌みたいな二本の前脚を擴げて泳ぐタガメ、まるで棒切れの樣な野暮な色と恰好をした水カマキリ等、何れも劣らぬ水中の追剝・辻強盜連が、互に牙を鳴らして睨み合つてゐる。

長い冬眠から覺めた蜜蜂は、朝早くから花を訪ね、蜜と花粉とを集めて子孫を養ふべく奮闘を始め、胡蜂の雌は隱れ家を出て、新しい家庭の建設に取りかゝる。花蜂はくさむらに野鼠の巣を探して、おのが巣を營むべく活動を始め、大工蜂は枯杭に穴をほつて、子供の養育室を建て、壁屋蜂は泥を含んで、これ又育兒室を造る。


ゴマダラヒトリ

庭石の傍では、小蟻がせつせと細かい土塊をくはへ出して巣を造り始める。皆子孫のためにいそ〳〵として働いてゐる。

梅の若芽が伸び、桃の花の散つたあとから青い芽が顔を出して暫くすると、鮮やかな緑がいつしか灰色の網で包まれてしまふことがある。見ると、三分程の水色のいやらしい梅毛蟲が、うじや〳〵と群つてゐる。又裏庭に生えた蕗の葉が食ひ荒されてゐることもある。前者は梅毛蟲、一名天幕毛蟲、後者はゴマダラヒトリといふ蛾の幼蟲の仕業である。

草花の莖にはアブラ蟲が盛んに子を產む。その間を

黒蟻が徘徊してアブラ蟲から蜜を貰ひ、代償として無力のアブラ蟲を保護する。さうして蟻の警戒の裏をくゞつて、草カゲロフやヒラタアブの幼蟲は、またこのアブラ蟲を食つて歩く。

春の樂園も、裏をのぞいて見ると恐しい生存競爭の大悲劇の舞臺である。生きる者、死ぬ者、食ふ者、食はれる者、それらの者が各〻生命を完うし、子孫の繁殖を計るべく奮鬪努力する樣は、蟲ながら實に敬服に値する。

路傍に、庭園に、蠢々として動く無心に見える小蟻の一擧一動にも、深い思慮と大きな意味が含まれてをり、花に寄り添ふ胡蝶の舞も、單純な悦樂ではない。生物界の生存競爭の大活劇は、先づ陽春三四月に幕を切つて落し、細かい蟲と蟲、蟲と植物との爭鬪に始り、やがて幾千幾萬の蟲が續々と舞臺に現れて、各〻得意の演技をなすのである。その千態萬樣、十人十色の妙技の表現は、正に他の生物界に見られない興味がある。 蟲の研究、それは詰らぬ仕事のやうだが、その底に潜む尊い敎訓、深刻な諷刺は、假名手本忠臣藏以上に吾々の興味をそゝる。

私は多くの人々が、蟲に對してもう少しの同情と理解とを持ち、蟲を研究する人達に、今少し尊敬を持つてほしいと思ふ。 日本の昆蟲學は未だ〱貧弱であり、昆蟲學者は餘りに輕視されてゐる。

（蟲の世界を探ねて）

岡本綺堂　名は敬二。劇作家。東京市の人。明治五年生。
頼家　源頼朝の子。元久元年(一二〇四)歿、年二十三。
修禪寺　一名桂谷山寺。眞言宗。
元久元年　紀元一八六四年。

二五　夜叉王

岡本綺堂

登場人物

面作師　夜叉王　源左金吾頼家(二十三歳)
夜叉王娘　桂　下田五郎景安(十七八歳)
同　楓　修禪寺の僧

元久元年七月十八日。

伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口に竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畑を隔てて塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓、門に立ちて人を見送る體。そこに修善寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿後より下田五郎景安頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや、疎忽があつてはなりませんぞ。

楓、はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉　思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませんが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は緣に腰打掛く。

夜叉　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩に其の方を召し出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣しておいたるに、日を經れども出來せず、幾度か延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散散ぢやぞ。

頼家　予は生まれ付いての性急ぢや。何時まで待てど暮せど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣すこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ。仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐れ入りましてござります。勿體なくも、征夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一箇も無く、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を——。其の申し譯は聞き飽いたぞ。

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫びを申せ。

夜叉　其の期日は申し上げられません。左に鑿を持ち右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは、生無き粗木を削り、男女・天人・夜叉・羅刹ありとあらゆる善惡・邪正の魂魄を打込む面作師。五體にみなぎる精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝごとく彼に通

三島神社　伊豆國(靜岡縣)田方郡三島町にある官幣大社。

ひて、始めて面も作れまする。たゞし、其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年・二年の後か、われながら確とはわかりません。

僧　これ〳〵夜叉王殿。上樣御自身も仰せらるゝ如く至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めの無い事申し上げたら、御疳癖が愈募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからう。

夜叉　ぢやというても出來ぬものはなう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞え

受けう（受けよう）

た者ぢやに——。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に殘すのは、如何にも無念ぢや。

頼家　何、無念ぢやと——。さらば如何なる祟を受けうとも早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら早急には——。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

疳癖募りし頼家は、五郎の捧げた太刀引取つてあはや拔かんとす。奥より桂走り出で、

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

頼家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭り下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。なう父樣。

と顧みれども、夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

頼家　えゝ、おのれ前後不揃のことを申し立てて、予をあざむかうでな。

桂　いえ〳〵、嘘僞ではござりません。面は確かに出來して居りまする。これ父樣、もう此の上は是非がござんすまい。

ゐられう（ゐられいよう）

楓　ほんに然うぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面を、寧そ獻上なされては――。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事ではない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う早う。

楓　あい〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて賴家の前に捧ぐ。賴家無言にて少しく解けたる體なり。

桂　噓僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげて、

賴家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣お顏に生き寫しぢや。

賴家　むゝ。

と飽かず打ちまもる。僧はしたり顏に、

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れ

ぬ男ぢや。はゝゝゝゝ。

夜叉王、容を改めて、

夜叉 何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致し方もございません。方々には其の面を何と御覽なされまする。

賴家 さすがは夜叉王、天晴のものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉 天晴との御賞美は、憚りながらお鑑識違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居ります。

五郎 面が死んで居るとは——。

夜叉 年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色なく、魂魄も無き死人の相——。それは世にある人の面ではございません。死人の面でございまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きたる人の面——。

夜叉 いや〳〵どう見直しても生ある人ではございません。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈怪異なんどの類——。

僧 あ、これ〳〵、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。

頼家　御意に適へば、それで重疊。有難くお禮を申されい。

頼家　むゝ、とにもかくにも此の面は頼家の意に適うた。持ち歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば——。

頼家　おゝ所望ぢや。それ。

顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。桂、箱を捧げて庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿明日又逢ひませうぞ。

頼家行きかゝりて物に躓く。

頼家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧進み出でて桂に雪洞を渡す。桂、假面の箱を僧に渡し、雪洞を持つて案内す。夜叉王はぢつと思案の體なり。

楓　父樣、お見送りを——。

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出で行く。夜叉王起ち上つて霎時默然として沈思しゐたりしが、やがてつか〳〵と縁に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下げ、あはや打砕かんとす。

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

楓は驚き取縋りて、

夜叉　切羽詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは、悔

んでもかへらぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を貽さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人・上手でも、細工の出來・不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出來ようならば、それが卽ち名人ではござりませんか。

夜叉　むゝ。

楓　拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、これから、愈精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

と縋りて泣く。　夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢたり。

（修禪寺物語）

女子新國語讀本　巻四終

昭和八年八月十二日印刷
昭和八年八月十六日發行
昭和九年一月十三日修正再版印刷
昭和九年一月十七日修正再版發行

版權所有

女子新國語讀本
定價　巻一――巻七　各金六十錢
　　　巻八――巻十　各金五十八錢

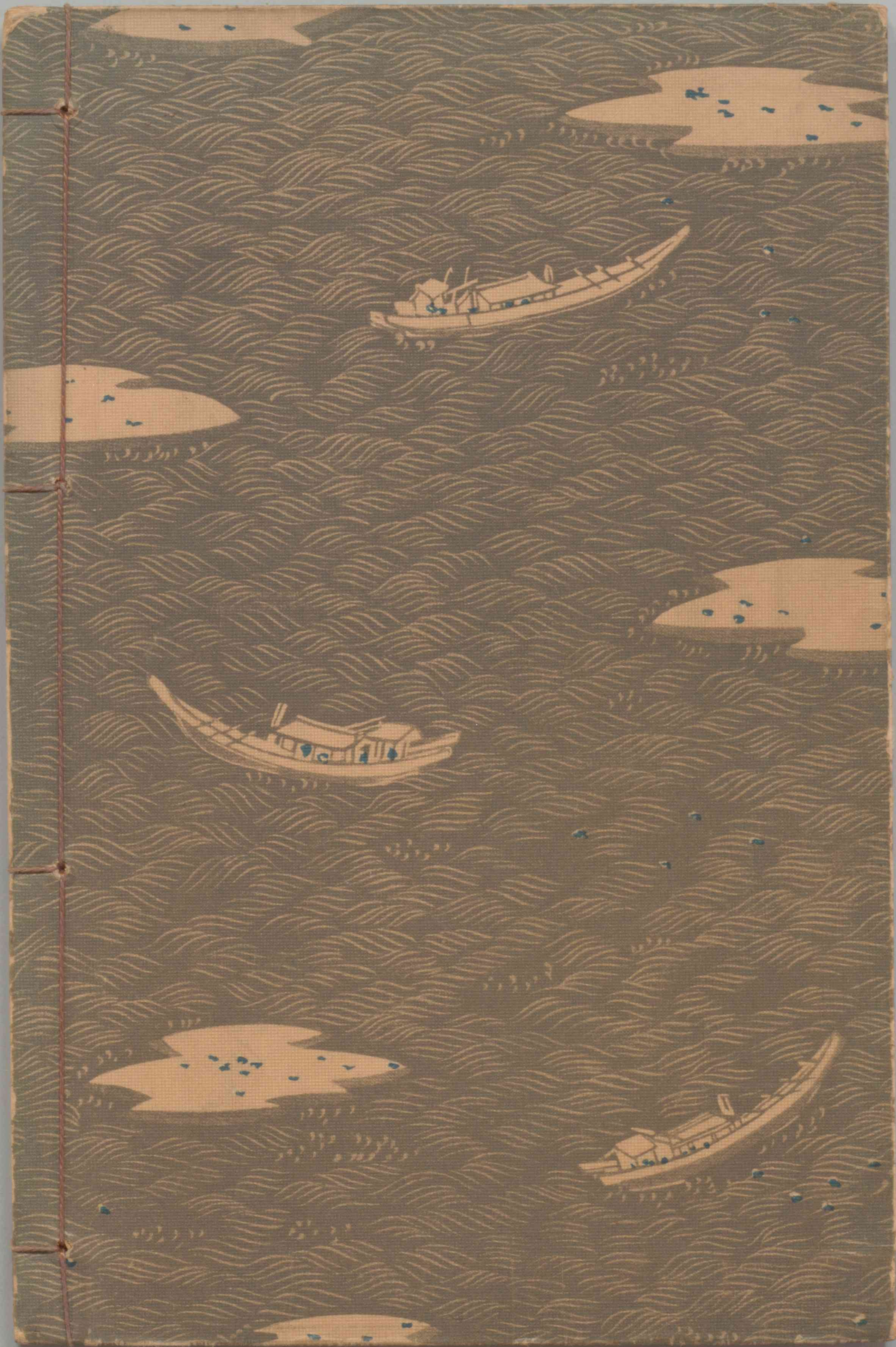
編者　安藤正次
編者　東條操

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目一番地
株式會社　三省堂
代表者　龜井寅雄

印刷者　東京市蒲田區出雲町一〇一番地
株式會社　三省堂蒲田工場

發行所
（東京市神田區神保町一丁目一番地　振替東京三一五五五番）　株式會社　三省堂
（大阪市西區阿波座下通二丁目六番地　振替大阪八一三〇〇番）　株式會社　三省堂大阪支店

新女國文四

【蒲田製本】

二ノ一 二十番 毎山三喜子